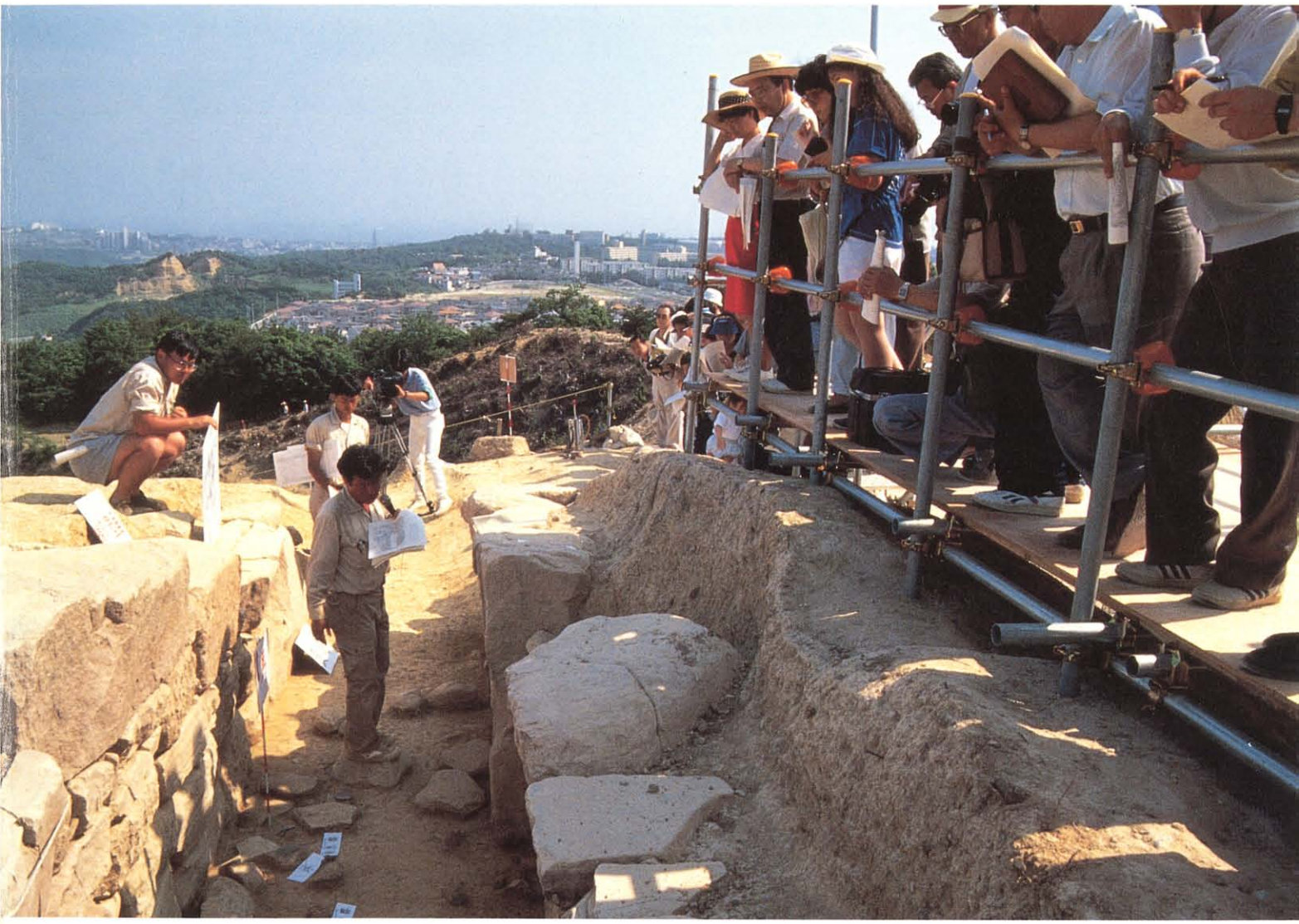
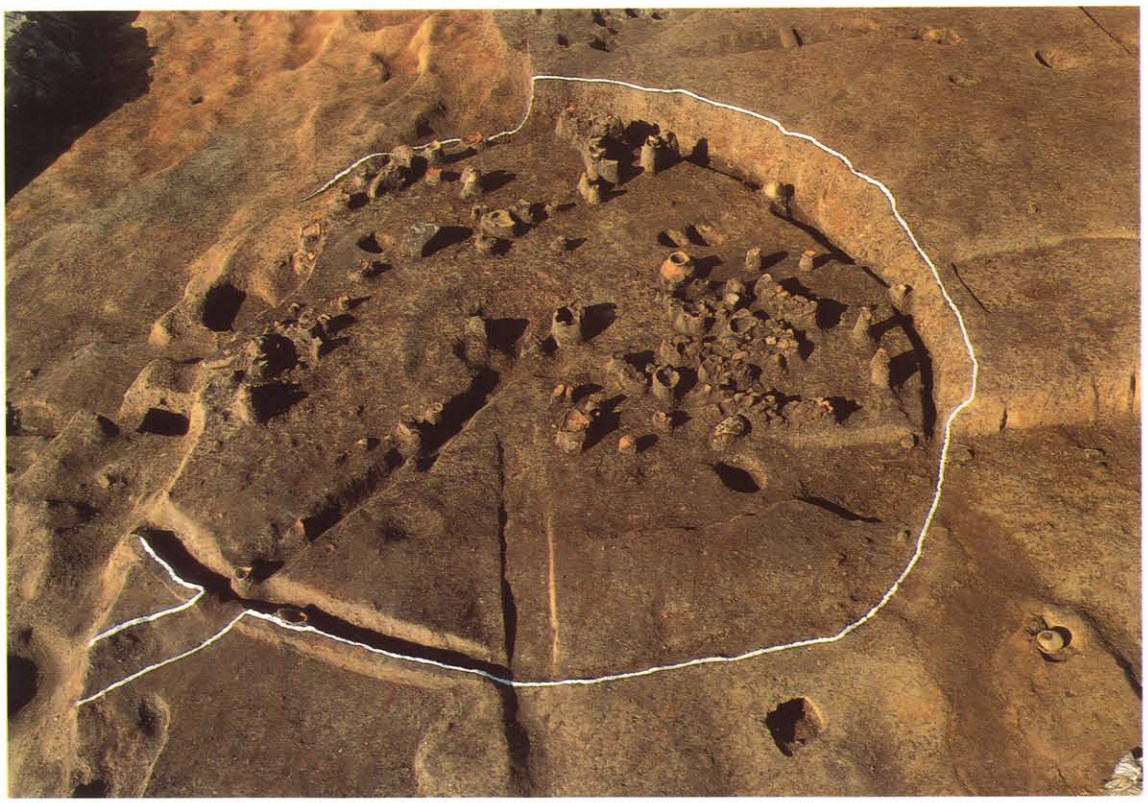
平成元・３年度 遺跡現地説明会資料



神戸市教育委員会

森北町遺跡　調査区全景



森北町遺跡　SB04全景

本山遺跡
銅鐸　出土状況

本山遺跡　石斧 石包丁　出土状況

高塚山古墳群　２号墳　左側壁

高塚山古墳群　２号墳　馬を中心とした線刻画

高塚山古墳群
7号墳・8号墳　遠景

高塚山古墳群
8号墳　石室

北神第２地点古墳　石室全景

北神第３地点古墳　奥壁線刻

目　　次

森北町遺跡 …… 1

本山遺跡 …… 13

高塚山古墳群 …… 21

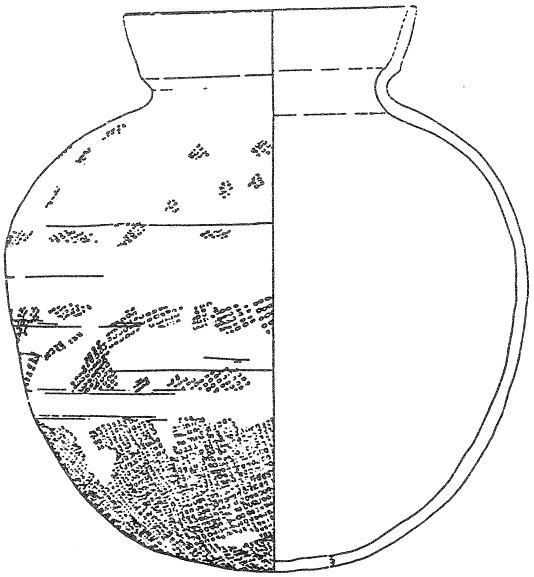
高塚山古墳群 …… 33

北神第2地点古墳・第3地点古墳 …… 47

森北町遺跡

第８次調査

現地説明会資料



平成元年１１月５日

神戸市教育委員会

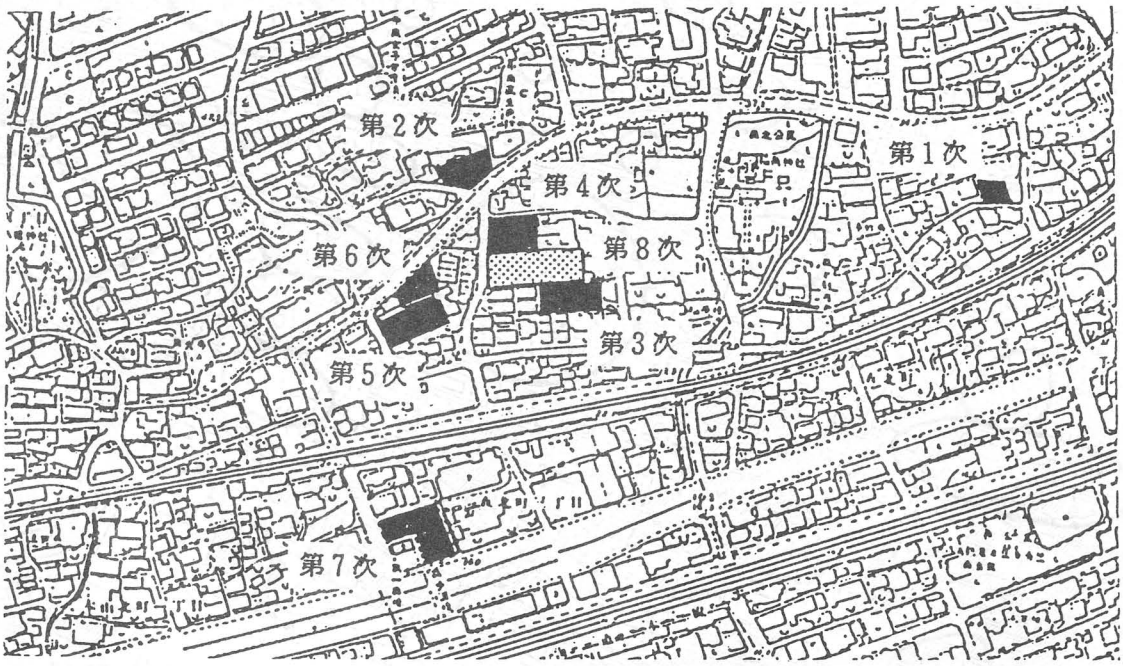
表紙の韓式土器は第２遺構面の第５池状
遺構から出土したものです（縮尺１：４）。

1.はじめに

森北町遺跡は，昭和39年にその存在が確認された遺跡で，以降７次にわたり，発掘調査が行われています。

これらの調査の成果から，当地では縄文時代から現在にいたるまで，ひとびとの生活が継続的に営まれてきたことがあきらかになってきました。とりわけ，弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が多数確認され，当時かなり大きな，そして有力な集落が存在したことが推定されます。

今回（８次）の調査は，マンション建設に先立ち，およそ1400㎡について実施しています。



調査地位置図（縮尺１：５０００）

2.周辺の遺跡

東灘区内の遺跡は，その立地から，平野部に立地するものと六甲山南麓の斜面地に立地するものとに分けられます。平野部の遺跡は厚く堆積した洪水砂に覆われていたため，東求女塚・処女塚などの古墳をのぞいて最近までほとんど知られていませんでした。

しかし，近年の調査によって郡家・住吉宮町・本山など多くの遺跡が確認・調査されています。これに対して，六甲山南麓の斜面地に立地する遺跡，とくに弥生時代の遺跡は東から東山・森奥・坂下山・森北・金鳥山・神戸女子薬科大学構内・保久良神社・荒神山・赤塚山と古くから数多くが知られています。また，銅鐸出土地として森・生駒・渦ヶ森の３ヶ所が知られています。

森北遺跡周辺の遺跡 （縮尺 1:25,000）

1.深江北町　2.三条岡山　3.会下山　4.森北町　5.東山　6.生駒銅鐸出土地　7.坂下山
8.森奥　9.東灘No.24　10.東灘No.25　11.森銅鐸出土地　12.神戸女子薬科大構内
13.出口　14. 井戸田　15.東灘No.33　16.東灘No.34　17. 北青木　18.金鳥山
19.保久良神社　20. 東灘No.22　21.東灘No.17　22.岡本梅林古墳　23.ヘボソ塚
24.本山　25.東灘No.16　26.岡本　27.住吉宮町　28.東求女塚古墳

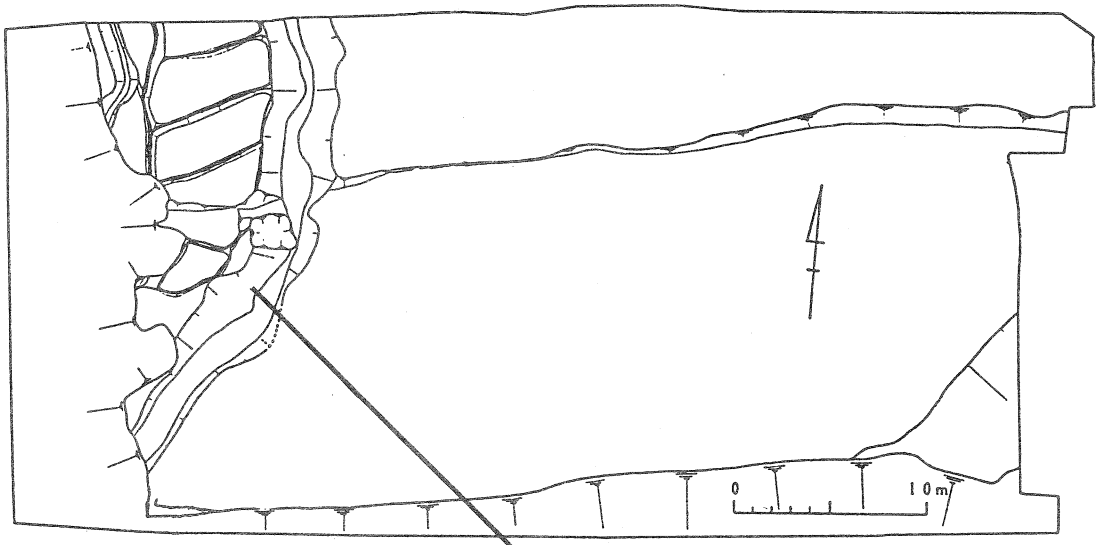
2

3.調査の概要　今回の調査では，４枚の遺構面が確認されました。

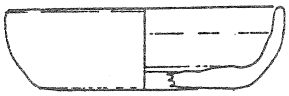
第１遺構面　調査区の西部で洪水砂に覆われた水田址と流路跡が検出されました。

水田　水田址は，幅20cmほどの小さなあぜで長方形に区画され，ひとつの面積が15㎡程度と比較的小さなものです。このような小さな区画は斜面地で水田を営む際の水まわりの工夫によるものです。このような水田は現在でも，山間部の小規模な水田において見ることができます。

水田を覆う洪水砂の上層から奈良時代の土器が比較的まとまって出土していること，耕作土から７世紀代の須恵器が出土していることから，この水田は奈良時代以前，おそらく７世紀代のものと考えられます。

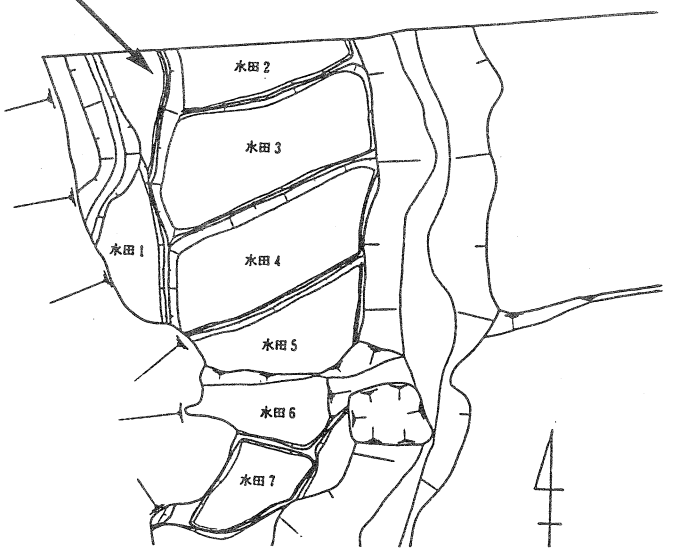


第１遺構面平面図
（縮尺１：４００）



須恵器（水田上面出土）

（縮尺　1：3）



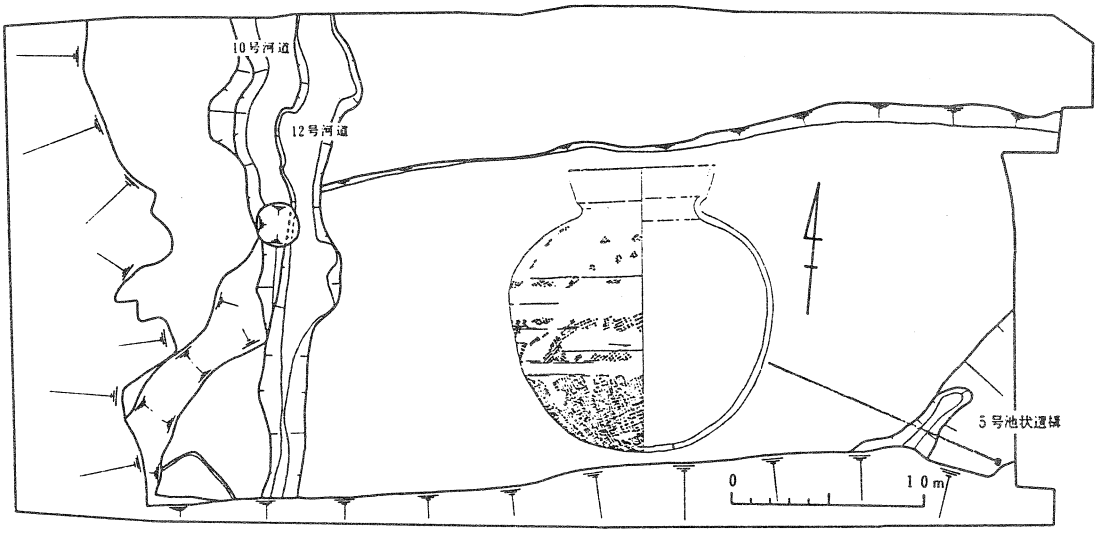
水田遺構平面図

3

第２遺構面　５世紀後半の遺構面と考えられます。池状遺構１ヶ所（５号池状遺構），流路２条（10・12号河道）などが検出されました。

５号池状遺構　池あるいは川と考えられる遺構です。須恵器・土師器のほか，韓式土器が出土している点で注目されます。

10・12号河道　ともに最大幅４ｍ・深さ１.3mほどの南流する流路です。５世紀後半の須恵器・土師器が多量に出土しました。また，河道10からは祭祀に使用した滑石製の双孔円板[※1]（鏡の模造品）や臼玉[※2]も出土しています。



第２遺構面平面図（縮尺１：４００）

第３遺構面　４世紀後半から５世紀前葉にかけての遺構面と考えられます。竪穴住居１棟（１号竪穴住居），流路３条（２・３・11号河道），洪水砂層などが検出されました。

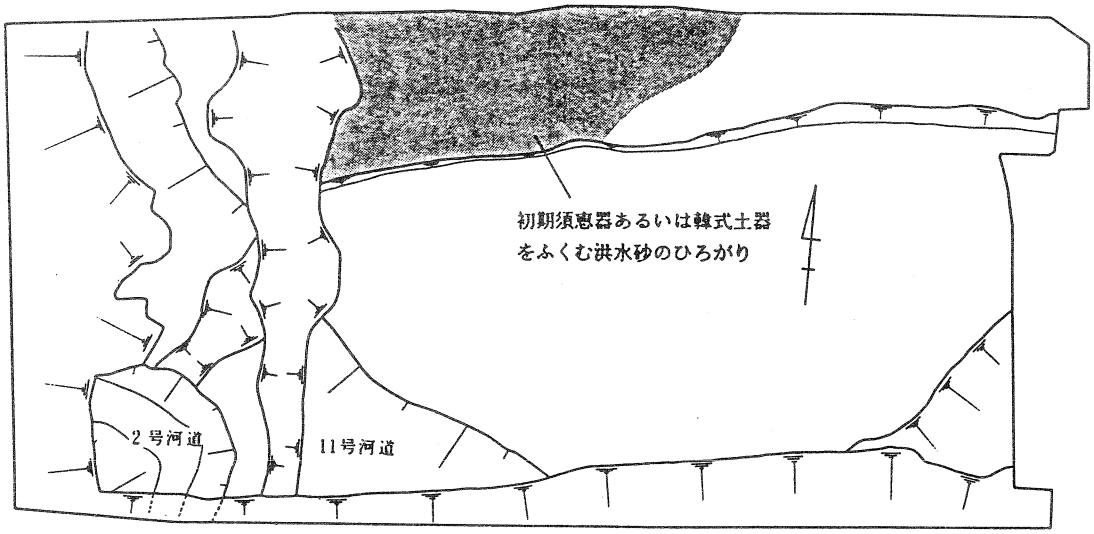
１号竪穴住居　調査区の南端にあり，その北部分を調査したにすぎません。方形の住居で，５世紀初めの須恵器が出土しています。

11号河道　北西から南東に流れる浅く，広い流路です。須恵器は確認されず，５世紀初頭の土師器や石製の紡錘車[※3]（糸を紡ぐ道具のはずみ車）が出土しています。

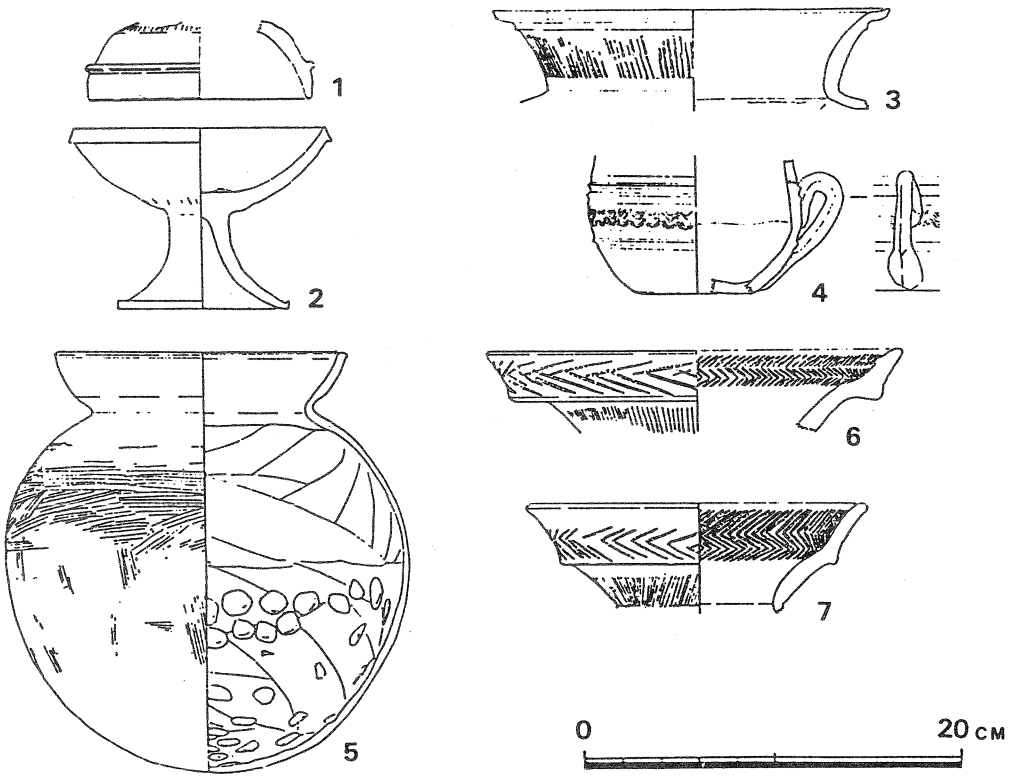
２号河道　北西から南東に流れ，カーブして南西に流れる深さ１.5mほどの流路です。４世紀後半の土師器が多量に出土しました。それらのなかには，尾張（愛知県）から持ち運ばれてきた土器がみとめられます。また，スカイブルーのガラス玉が１点出土しています。

3号河道　　2号河道に削られ，ごく一部が調査区の南西隅で確認された流路です。4世紀代の土師器が出土しています。

洪水砂　　調査区北半の中央付近に堆積していた砂層で，土師器とともに初期須恵器[※4]あるいは韓式土器[※5]が出土しています。

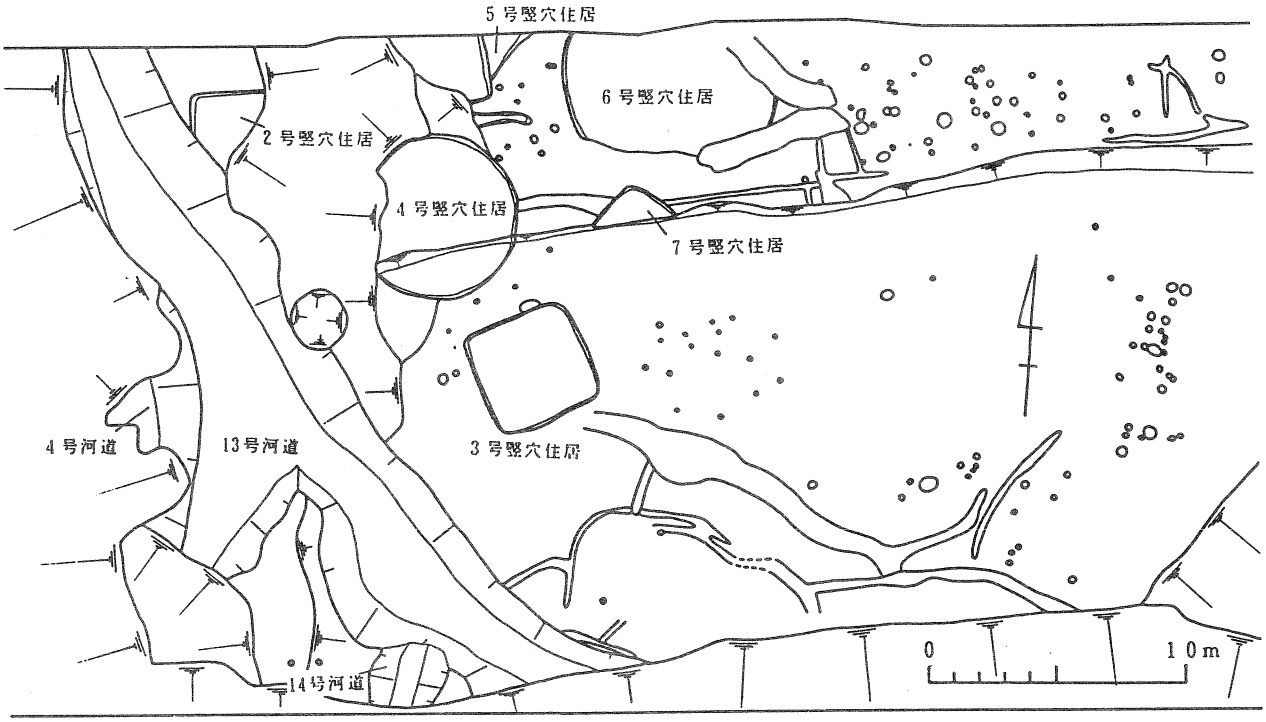


第3遺構面平面図（縮尺1：400）



第3遺構面出土遺物実測図　（1～4：洪水砂，5～7：2号河道）

第４遺構面　　３世紀から４世紀にかけての遺構面と考えられます。竪穴住居６棟（２～７号竪穴住居），流路２条（４・13号河道），溝などが検出されました。



第４遺構面平面図（縮尺１：３００）

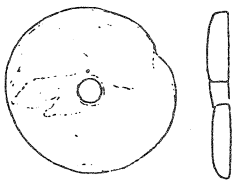
２号竪穴住居　　13・10号河道によって大部分を流され，そのごく一部が残る方形の竪穴住居です。

３号竪穴住居　　弥生時代後期の１辺４.5mをはかる方形の竪穴住居です。大量の土器のほか，鉄入石斧（手斧として使用）が出土しています。

４号竪穴住居　　直径６.5mをはかる円形の竪穴住居です。大量の弥生時代後期の土器とともに銅鏃が出土しています。

５号竪穴住居　　第６次調査でその北半が調査されています。１辺４mあまりをはかる方形の竪穴住居です。覆土から多量の炭が検出され，焼失したものと考えられます。少量の土器片が出土しています。

竪穴住居４出土
銅　鏃
（縮尺　２：３）



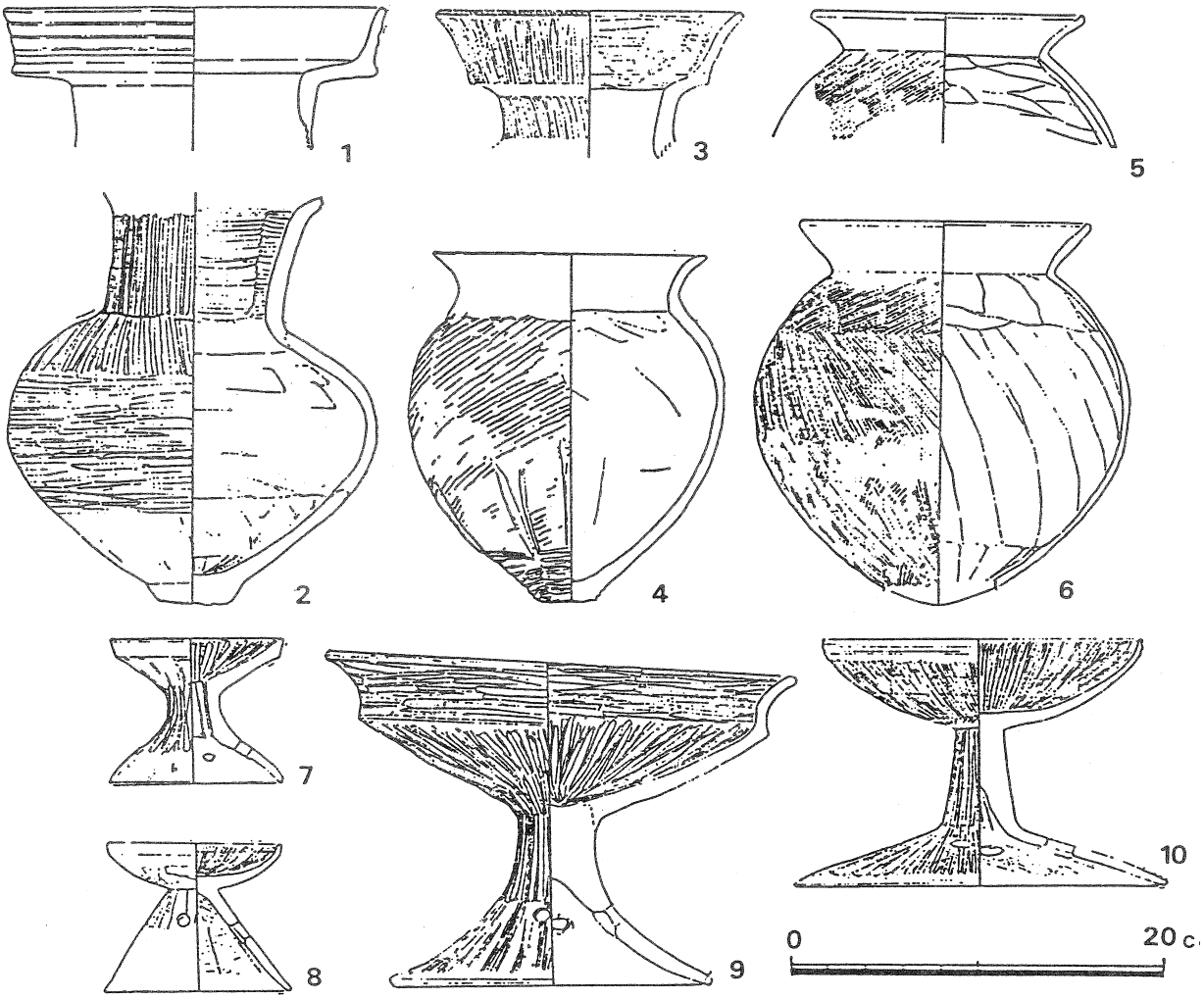
竪穴住居６出土
紡錘車
（縮尺　１：２）

6

6号竪穴住居　南部分の流失がひどいため，かたちがはっきりしませんが，直径8mをはかる円形の竪穴住居と思われます。この住居からも多量の炭が検出され，焼失したものであることが確認されました。弥生時代中期の土器や石製の紡錘車が出土しています。

7号竪穴住居　北隅だけが残存している方形の竪穴住居です。少量の土器片が出土しています。

13号河道　北西から南へ流れる流路です。弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が多量に出土しています。なかでも中層では，完形の，あるいはそれに近い土器が，「ゴロゴロ」という形容がふさわしいくらいに多く出土しています。これらのなかには，山陰・山陽・河内をはじめとして，遠くから持ち運ばれてきた土器が確認されています。



13号河道出土遺物実測図（縮尺１：４）

7

4.まとめ

今回の調査の成果で注目されるのは，第一に，７世紀における農業経営の実際が，その一端ではありますがあきらかになったことです。棚田による小規模な農業経営は当時の新田開発の実態をかいまみるようです

第二に，弥生時代後期から古墳時代にかけて，当地にかなり有力な集団が存在していたことの証拠がかたまってきたことです。

全国各地で弥生時代末から古墳時代初頭にかけての集落遺跡が調査されていますが，それらは大きく２つに分類することができます。ひとつは小規模な集落で，そこで用いられる土器も在地のものがほとんどのものです。大多数の集落はこちらに分類されます。これに対して，比較的大きな集落で，用いられる土器に在地のもののほか，他地域から持ちこまれたものがかなりの割合でみとめられ，また，当時の貴重品・ハイテクの粋ともいうべき青銅製品の出土することが多いものがあります。これらの集落はどこにでもあるわけではなく，小規模な集落群のなかにその核となるかのように点在します。

森北町遺跡は後者に分類されましょう。他地域から持ちこまれた土器はそれらの地域の人々との直接の，あるいは間接の交流があったことをあらわすものでしょうし，青銅製品はここが技術・文化の中心であったことをあらわすものでしょう。森北町遺跡ではこれまでにも中国製の銅鏡・国産の銅鏃などが出土しています。また，５世紀に入り，朝鮮半島から新しいやきものが伝わると、森北町遺跡の人々はさっそくこれを入手しています。ここにも彼らの先取性がうかがわれます。

これまでの調査の成果によって，この遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけて，一般の村々を代表し，その核となるような，あるいは他地域との交流のセンターとなるような拠点集落とでもよぶべきものであることがあきらかになってきました。

用語の解説

※1
双孔円板

有孔円板とも言います。主として古墳時代中期に用いられた滑石製の形代で円面鏡をかたどっています。同種のものに剣をかたどったものがあります。ともにひもを通す孔があけられており，榊などにさげられ，まつりにもちいられたもののようです。

※2
臼玉

偏平な小型の玉。臼のかたちににているのでこの名があります

※3
紡錘車

糸を紡ぐための「つむ」あるいは紡錘とよばれる道具のおもりの部分です。糸巻棒をこれにさして，糸をつむぐための回転にはずみをつけます。

※4 ※5
初期須恵器・韓式土器

日本では，５世紀のはじめまで土師器とよばれる褐色の野焼きのものが使用されていました。

４世紀末から５世紀の前半には朝鮮半島から大量の文物が人々とともに渡来しましたが，そのひとつとして，５世紀のはじめにろくろを用いて成形し，窯をつかって1000度をこえる高い温度で焼き上げる土器製作の技術がつたわりました。この方法で作られた土器を須恵器といいます。

これらの土器のうち，ごく初期のものは，彼の地の技法をそのままつたえており，朝鮮製・日本製のどちらとも見分けのつかないものすら存在します。こういった土器を韓国風の日本産土器という意味で韓式土器といいます。

また，須恵器のうち，それらが日本において日用品として一般的なものとなるまでのもの，貴重品であっただろうころのものを特に初期須恵器といいます。

※6
扶入石斧

柄をとりつけるためのえぐりをもつ方柱状の磨製片刃石斧。後世の手斧と同様の木材を削るための道具です。

西日本と朝鮮半島南部での出土例が多い遺物です。

市内弥生時代集落遺跡出土の銅鏡・銅鏃一覧表			
遺跡名	所在地	種類	出土遺構
森北町遺跡	東灘区森北町	銅鏡（前漢鏡）	包含層
森北町遺跡	東灘区森北町	銅鏃	包含層
森北町遺跡	東灘区森北町	銅鏃	竪穴住居
宅原遺跡	北区長尾町宅原	銅鏃	竪穴住居
長田神社	長田区長田町	銅鏃	溝状遺構
新方遺跡	西区玉津町新方	銅鏃	竪穴住居
青谷遺跡	西区櫨谷町松本	銅鏡（倣製鏡）	表面採集

MEMO

本山遺跡

現地説明会資料　　平成２年２月４日

1.はじめに　　本山遺跡は、現在、市街地となっている東灘区の平野部に所在する遺跡です。これまでに本山遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代後期・平安時代後期から中世までの遺構や遺物が発見されています。弥生時代の遺構は、現在までに発見されたものはなく、河跡などに大量の土器や石器などが出土しています。本山遺跡では，和歌山周辺や姫路周辺の土器などが出土しており、この地域の拠点的な弥生時代の集落と考えられます。

また，中世の遺構としては掘立柱建物や井戸などが発見されています。

2.調査の概要

２～４トレンチの調査

第２～４トレンチでは、３面の遺構面が確認されています。地表下約２.5㍍のところでは、近世の水田跡、約 3.0㍍では平安時代後期から中世の畠跡が、約 3.5㍍のところで弥生時代の遺構面が検出されています。

第１トレンチの調査

第１遺構面の調査を終了し、耕土・盛土を除去して下の土層（弥生時代遺物包含層）の上面を検出中に銅鐸が出土しました。

銅鐸　　銅鐸は横たわった状態で、鰭を水平よりもやや傾けて出土しています。現在，遺構に伴って出土しているのかを確認中です。

この銅鐸は鈕の部分は一部しか残っていませんが、身の部分は完全な形を保っています。現在では酸化して色が悪くなっていますが、出土当初はまったくさびておらず新しい10円玉のようなあざやかな色をしていました。身の部分の高さが約16センチメートルの比較的小型の銅鐸です。完全な形を推定すると21～22センチメートルほどになります。

鋳上がりも比較的良好で文様も鮮明です。一般的な銅鐸の分類にしたがえば、扁平鈕式四区画袈裟襷文銅鐸に分類されるものです。

また、埋納の時期は現在、不明です。

1

3.まとめ

銅鐸

銅鐸はこれまでに四百数十をこえる出土例がありますが、そのほとんどが他に遺構・遺物をともなわず、集落遺跡などからはなれた山中などの場所で出土したものです。

したがって銅鐸は山中や丘陵部に埋納され、祭祀の際に掘り出される祭器だという考えが一般的でした。また、伴出する遺物の少なさから銅鐸製造の年代、銅鐸を埋めた年代を正確にすることには、困難がありました。

銅鐸の平地での出土例は少なく、今回の例を含めその取り扱われ方の問題として、平地出土の銅鐸がもつ性格と山中出土の銅鐸がもつ性格が今後比較検討されることになるでしょう。　また今回発掘された銅鐸は付近から多量の遺物が出土しており、その検討によりいままで大まかにしかとらえられなかった銅鐸の埋納・廃棄の年代を明らかにする手掛かりが与えられることとなるでしょう。

石器類

第二に注目されるのは石器類の豊富さです。今回の調査地は西にひろがる弥生時代集落縁辺部の小谷地形の部分にあたると推測されますが、ここに残された石包丁の数量には目をみはらされます。

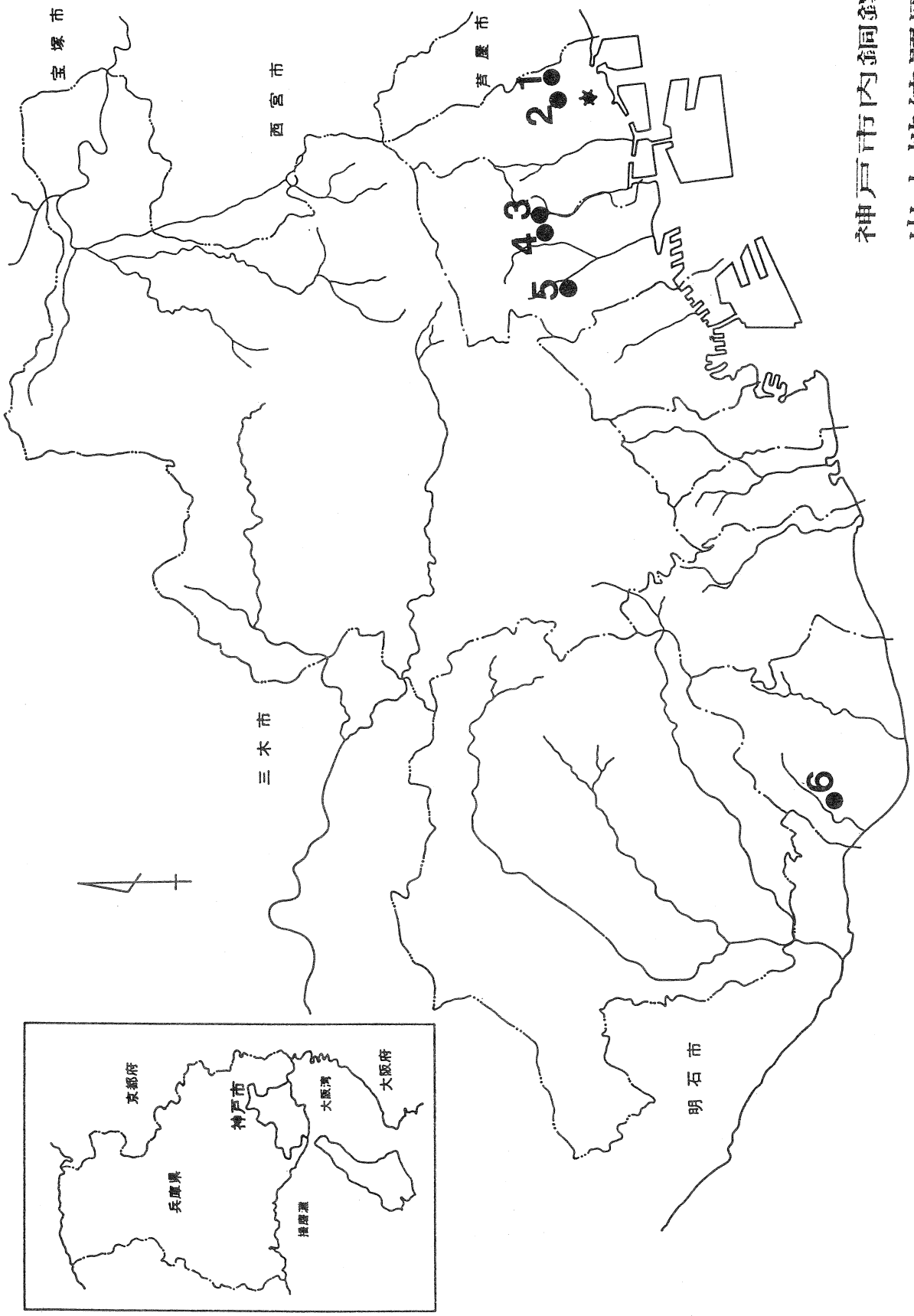
そのなかには大型石包丁が４～５点存在します。この遺物は、通例ひとつの遺跡で２点も出土すれば多い方と考えられるようなもので、出土しない遺跡がほとんどです。本山遺跡の出土量は通常のものではありません。

大量の石包丁のなかには、未製品も存在します。これらのことからすると、当遺跡においては流通にのるような石器生産がおこなわれていた可能性があるかもしれません。

磨製石剣は長さ18.4センチメートル・幅 4.0センチメートルのものです。磨製石剣は神戸市内では，数遺跡で破片が出土している程度で、完形品はかつて市西部で採集されたものについで２点目です。

神戸市内発見の銅鐸

No.	遺跡名	所在地	型式	法量	発見年	備考
1.	森	東灘区森北町６丁目14	外縁付鈕Ⅱ式 ４区袈裟襷	33.0	1964年	
2.	生駒	東灘区本山北町	扁平鈕式 ６区袈裟襷	53.2	1958年	
3.	渦森	東灘区渦森台１丁目	扁平鈕式 ４区袈裟襷	47.9	1934年	
4.	桜ヶ丘	灘区桜ヶ丘町神岡	1.外縁付鈕Ⅰ式 ２区流水文 2.外縁付鈕Ⅰ式 ２区流水文 3.外縁付鈕Ⅱ式 ２区流水文 4.扁平鈕式 ４区袈裟襷 5.扁平鈕式 ４区袈裟襷 6.扁平鈕式 ６区袈裟襷 7.扁平鈕式 ６区袈裟襷 8.扁平鈕式 ６区袈裟襷 9.扁平鈕式 ６区袈裟襷 10.扁平鈕式 ６区袈裟襷 11.扁平鈕式 ４区袈裟襷 12.外縁付鈕Ⅰ式 ４区袈裟襷 13.扁平鈕式 ４区袈裟襷 14.扁平鈕式 ４区袈裟襷	42.9 42.4 44.5 42.0 39.2 63.7 41.9 42.2 42.9 42.8 45.3 31.4 21.9 21.5	1964年	
5.	伝大月山	灘区大月山?	外縁付鈕Ⅰ式 ４区袈裟襷	41.3	1958年	
6.	投上	垂水区舞子坂３丁目	外縁付鈕Ⅱ式 ２区流水文	50.1	1928年	
※	本山	東灘区本山南町	扁平鈕式 ４区袈裟襷	21.? 推定	1990年	



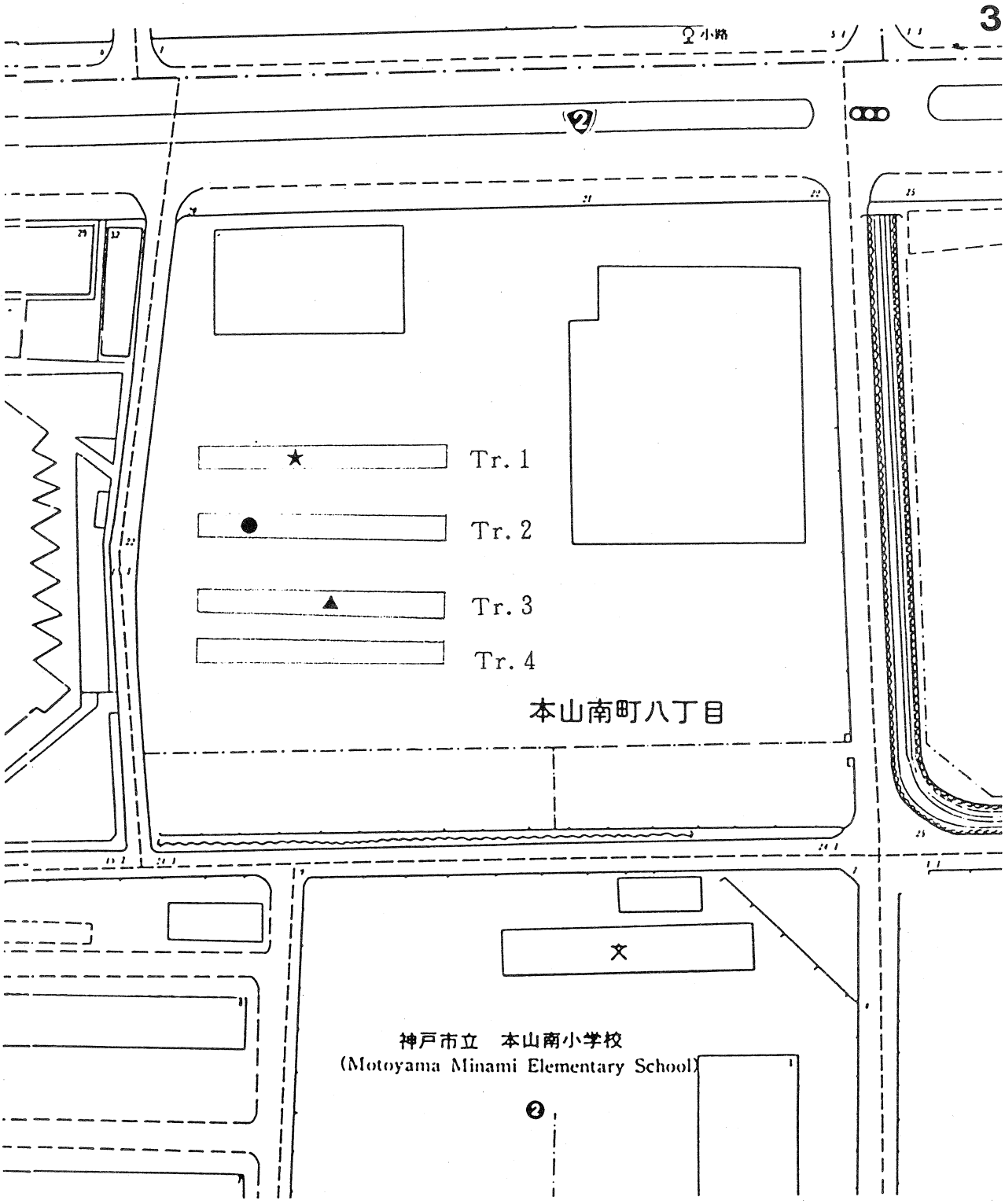
2

神戸市内銅鐸出土地位置図

銅鐸出土地　1：本山　2：森　3：生駒　4：渦

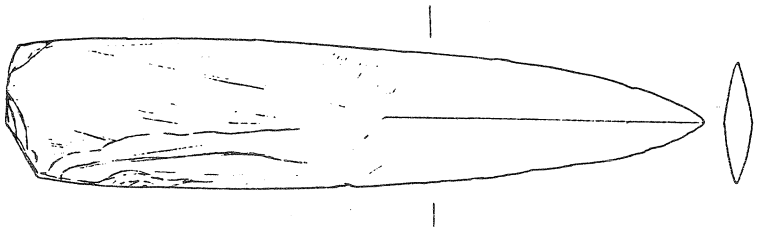
銅戈出土地　5：保久良神社

東灘区内銅鐸・銅戈出土地



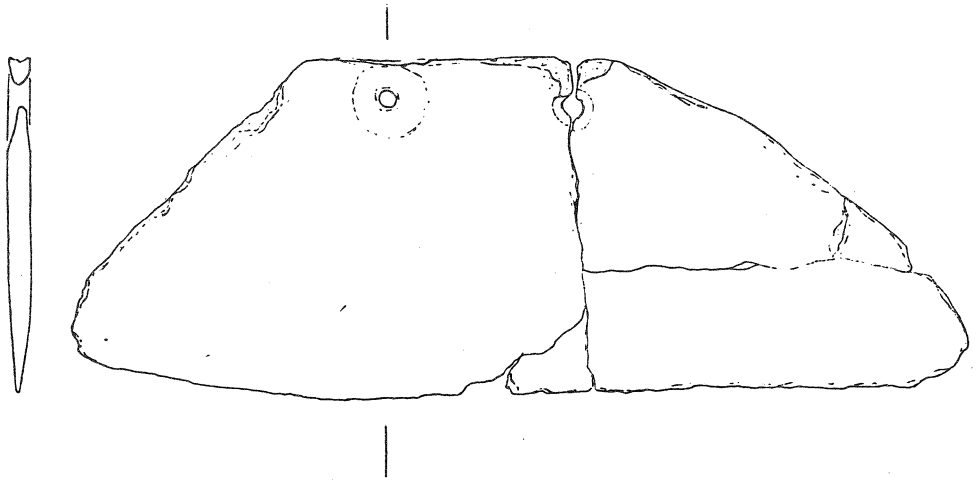
遺物出土地点　★：銅鐸
●：大型石包丁・石包丁・太型蛤刃石斧・砥石
▲：磨製石剣

本山遺跡調査区位置図
縮尺　約1/1000



第３トレンチ　２号流路出土

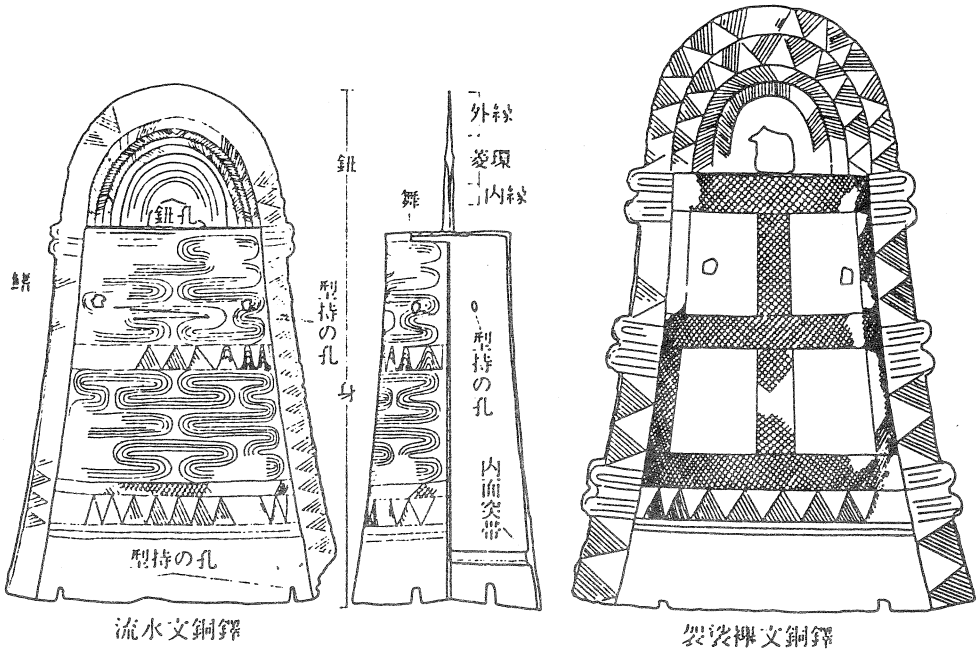
磨製石剣　　（縮尺１／２）



第２トレンチ　６号流路出土

大型石包丁　（縮尺１／３）

4



銅鐸の部分名称

参考　銅鐸とは　弥生時代につくられた青銅製の宝器のひとつ。この時代の国産青銅製祭器は他に銅釧・銅鏡や武器形の宝器としてのの銅剣・銅矛・銅戈・銅鏃などがありますが、これは釣り下げて鳴らす鈴の形とるものです。

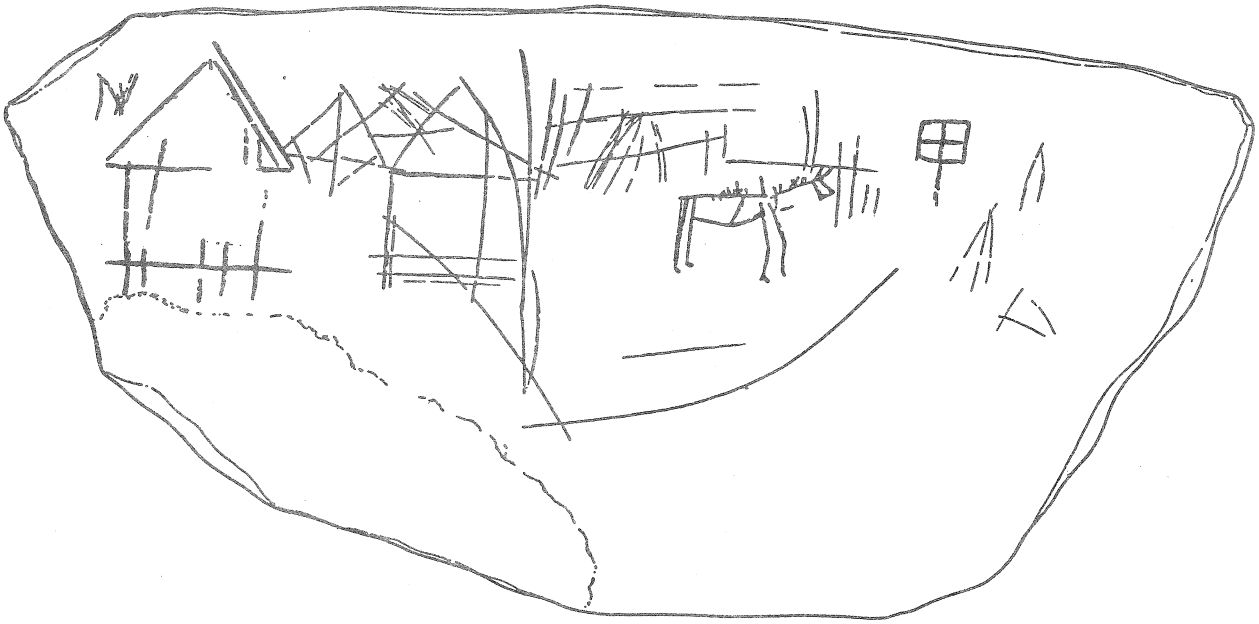
その祖形は弥生時代に農耕とともに伝えられただろう「朝鮮式小銅鐸」と考えられ、初期の小型のものから次第に大型化していくという変遷が認められます。また大型化とともに銅鐸をつりさげるための鈕の部分が実用的な厚いものから装飾の多い非実用的なものへと変化することも認められます。

この変化からは、本来この銅器がもっている鳴らすという機能をたもっていた初期のものが、次第に本来の機能を果たすよりも祭祀の場に据え置かれいつきまつられる対象となっていき、大型化していったという経緯を推測できます。

銅鐸の性格については、一般的には農耕に関係した「まつり」ごとに用いられたと推定されていますが、その多くが山中からなんらの施設も伴わず出土するため、必ずしも農耕に限定できないとの説もあり、確定はしていません。

また、銅鐸がなぜ弥生時代後期のある時期に埋納され、使われなくなったかについては、土中保管説・隠匿説・呪術祭祀説等いろいろな仮設があり、その実態は謎のままです。

高塚山古墳群
現地説明会資料



平成３年５月２６日

神戸市教育委員会

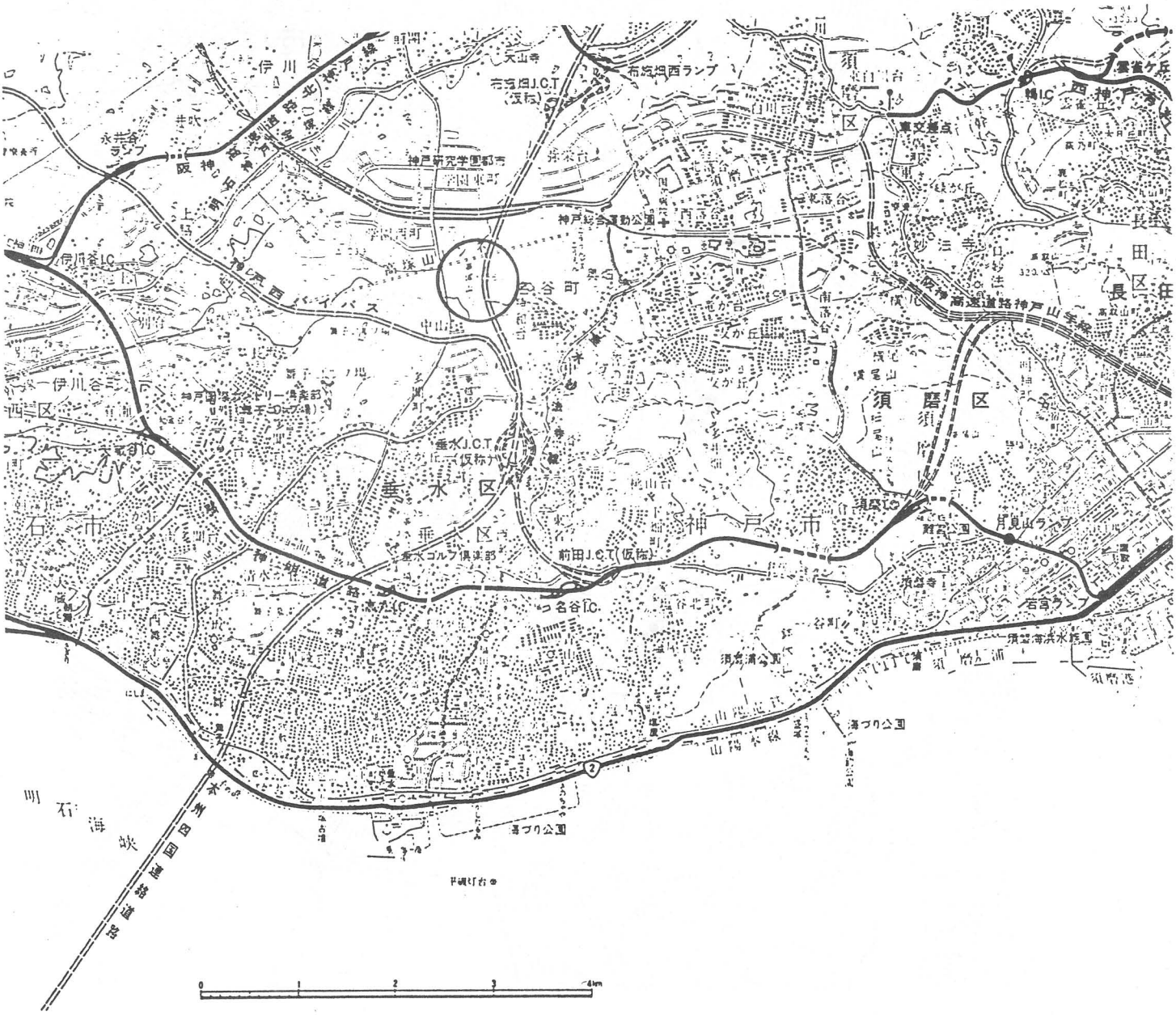
調査については、東侯物産株式会社の御協力を得ています。
また、神戸市文化財専門委員の和田晴吾，檀上重光両先生および、奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター　田中　琢センター長、奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館　猪熊兼勝室長の御指導をいただきました。

（表紙　高塚山２号墳　線刻壁画　スケッチ）

1．はじめに

垂水区多聞町字小東山に所在する高塚山古墳群は福田川と伊川に挟まれた丘陵上に存在してます。この古墳群は、古くから古墳時代後期の横穴式石室が数多くあることで知られています。分布調査や試掘調査によって15基程度あることが分かっています。

今回の調査は、資材置き場造成に伴うもので、平成３年３月１日から発掘調査を実施しています。



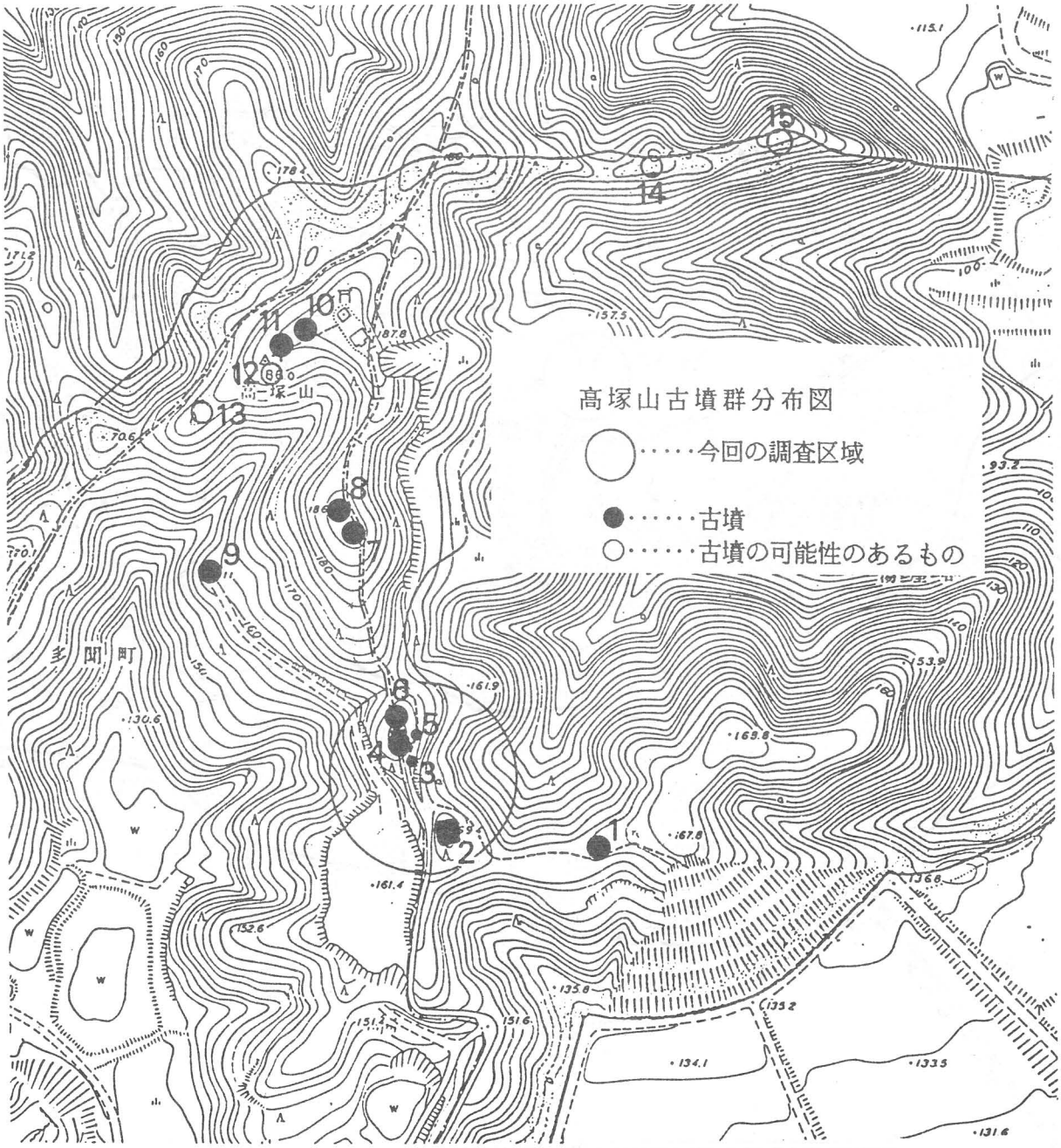
高塚山古墳群位置図

2．調査の概要

今回の調査範囲は、約2,000 m²で、当初、3基の古墳が存在しているものと考えられていましたが、新発見の2基を加え5基あることが分かりました。これらの古墳は、墳丘の形や、石室の構造・規模が若干異なっています。

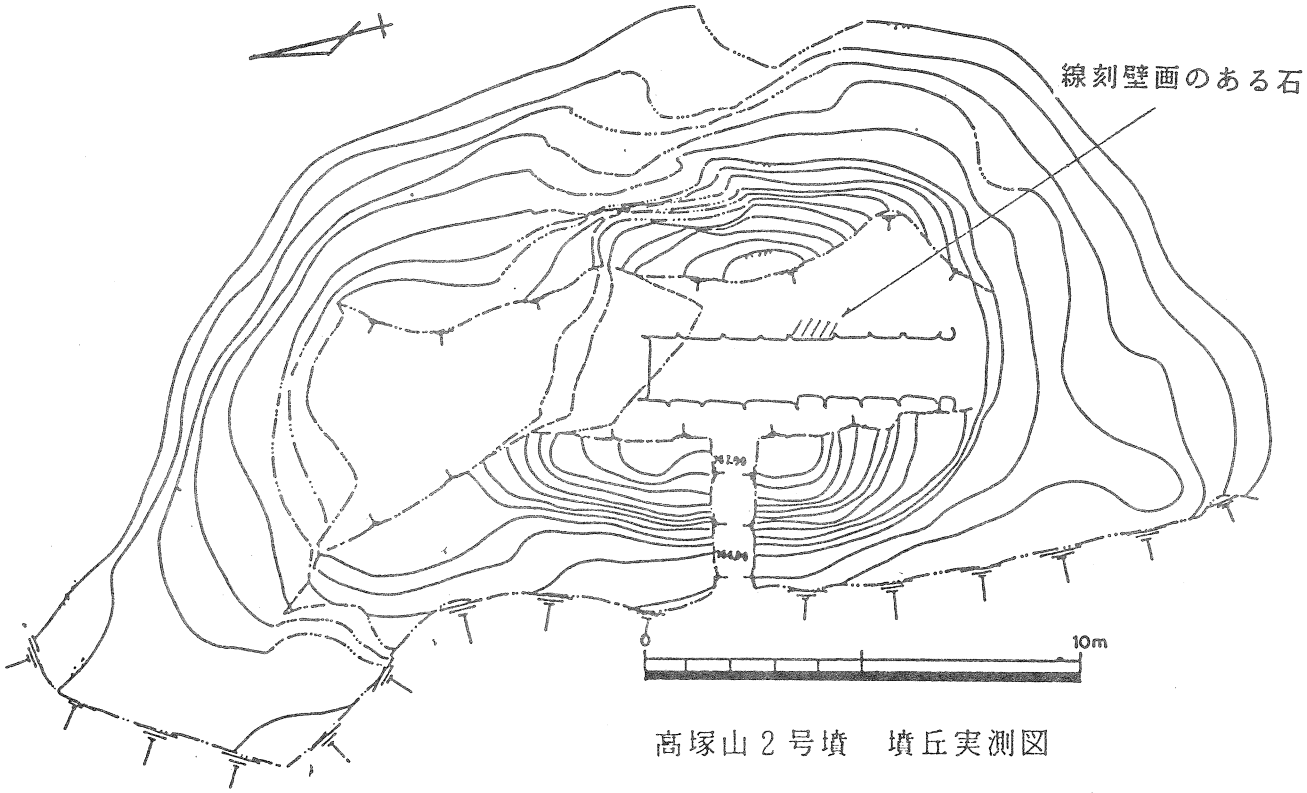
（表－1　高塚山古墳群調査一覧表参照）

図中の番号は、古墳番号に対応します。



表－1　高塚山古墳群 測量一覧表

古墳名	墳丘外形	墳丘規模	墳丘高（現高）	埋葬施設	玄室長	玄室幅 奥壁側・	玄室幅 袖側	玄室高（現高）	羨道長	羨道幅	羨道高
高塚山2号墳	方墳	南北12m・東西11m	1.6m	横穴式石室・右片袖式	3.45m	1.35m	1.45m	1.78m	3.35m	1.25m	1.3m
高塚山3号墳	不明	不明	不明	横穴式石室・無袖式	2.00m	1.10m	1.03m	0.7m	1.20m	0.95m	0.3m
高塚山4号墳	帆立貝式古墳？	全長23m	1.9m	横穴式石室・左片袖式	2.90m	1.16m	1.3m	0.8m	2.90m	0.8m	0.6m
高塚山5号墳	不明	不明	不明	横穴式石室	0.5m	0.95m	不明	不明	不明	不明	不明
高塚山6号墳	円墳	南北11m・東西12m	1.8m	横穴式石室・右片袖式	3.45m	1.22m	1.46m	1.77m	3.54m	1.15m	1.10m



高塚山2号墳　墳丘実測図

2号墳

墳丘と石室

一辺11m の方墳です。石室は、南に開口し、開口部の南側を平坦に削っています。周溝らしきものは認められませんでしたが、古墳の裾を削った痕跡がありました。この窪みから須恵器の甕の破片がたくさん出土しました。

埋葬施設は、凝灰岩の切石を一部に使用した右片袖の横穴式石室です。石面には、石を割った時のたがねの跡や、のみ状の工具で石面を整えた痕跡が残っています。石材は、バランス良く玄室を3段、羨道を2段に積んでいます。この古墳も盗掘を受けており、天井石はまったく残っていませんでした。

また、玄室入口の左側壁（東側）の一石が他の石に比べて表面がきれいに調整され、この面に馬などの絵を刻んでいます。

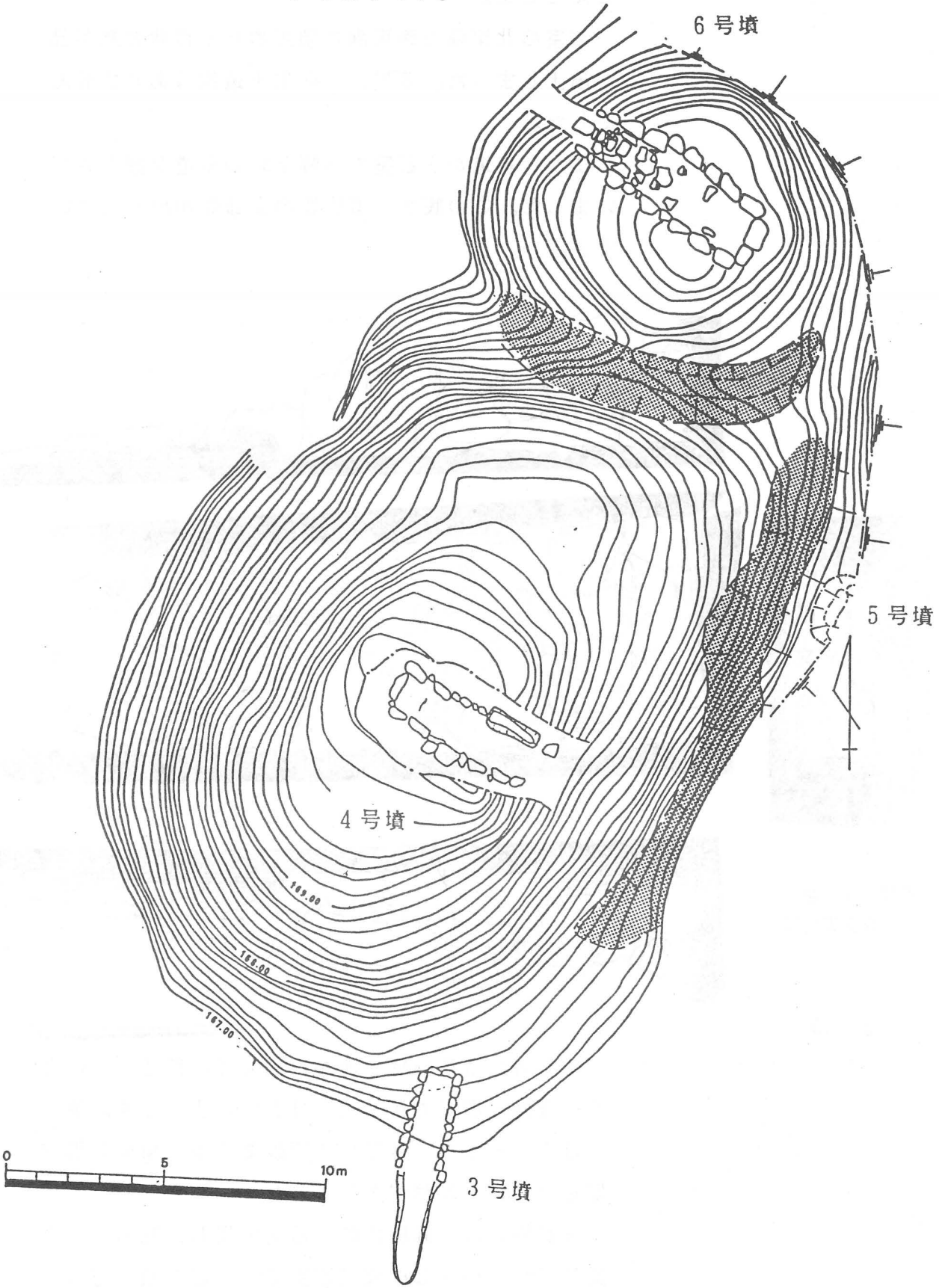
2号墳の線刻壁画

線刻は、石の右側から「田」の字にみえるものと中央に馬、その左に三角や縦横の直線を連続させた意味不明のものが描かれています。

馬は、たてがみを立てて、頭を右に向けて、前脚を僅かに曲げて立っています。背中には、鞍の様な表現も見られます。

高塚山2号墳　線刻壁画拓本

他の意味不明な絵も今後詳しく調べなければなりませんが、太い線と、細い線とを使いわけて描いているようです。



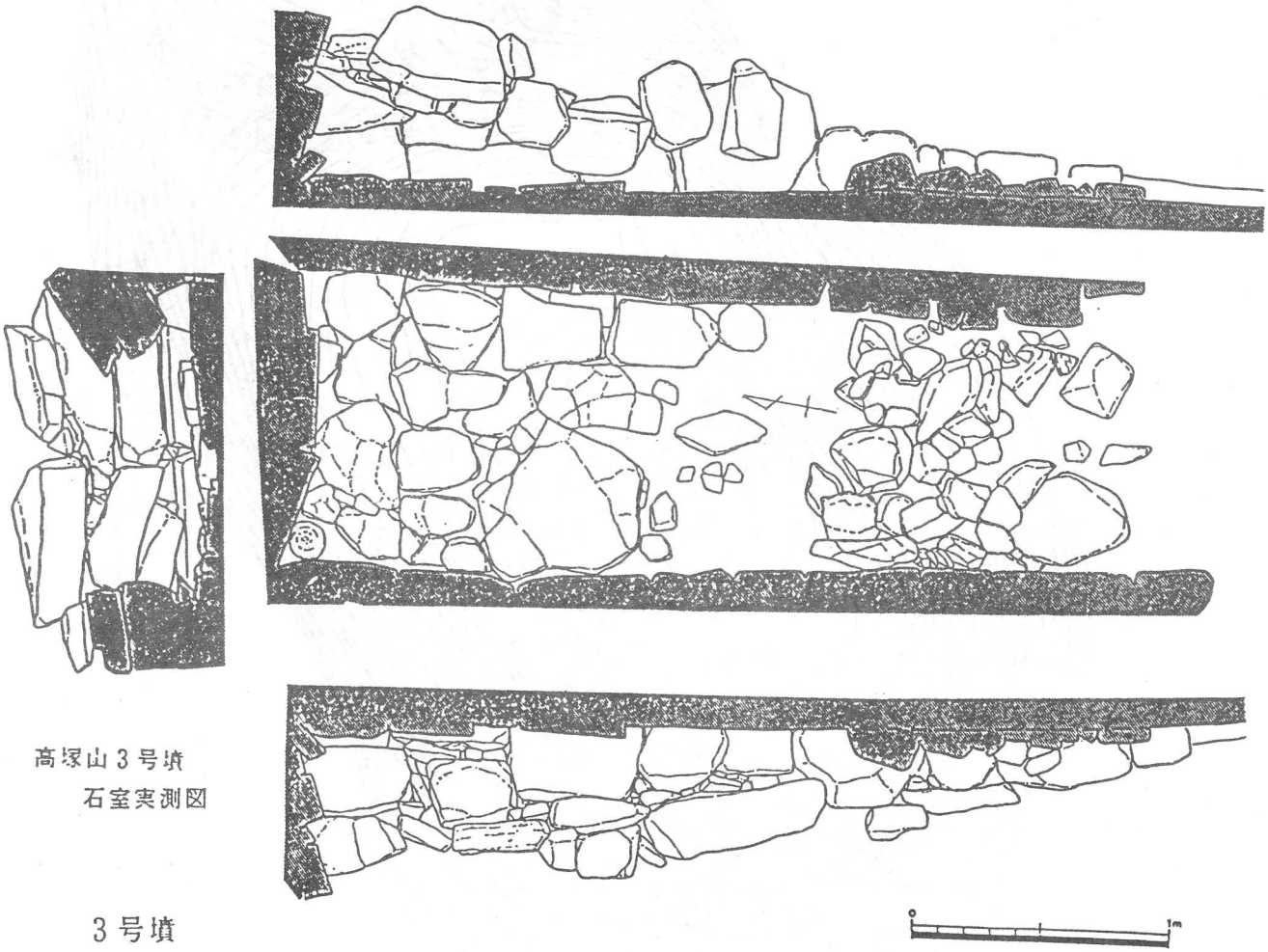
高塚山3号墳・4号墳・5号墳・6号墳　墳丘実測図

石室の床面状況

玄室の床面には、板石を敷いていたと思われますが、盗掘による攪乱が激しく、一部しか残っていませんでした。

玄室の北東隅と南東隅に須恵器坏や板状の鉄製品が出土しました。羨道からの出土遺物はありませんでした。

また、羨道から石室外へ幅2m の墓道が掘られていました。この底から須恵器の長頸壺が出土しています。



高塚山3号墳
石室実測図

3号墳

墳丘と石室

4号墳の墳丘の裾を僅かに削って、築造しています。今回の調査で新たに発見された古墳です。墳丘はほとんどなく、外形は不明瞭ですが、東側に溝が掘られていた痕跡がありました。

埋葬施設は、凝灰岩の割石を使用した袖のない全長3.2m の小さな横穴式石室です。石の積み方は、玄室を3段に、羨道を2段に積み上げています。天

井石は、すべて落ち込んでいましたが、盗掘を受けた痕跡はありませんでした。

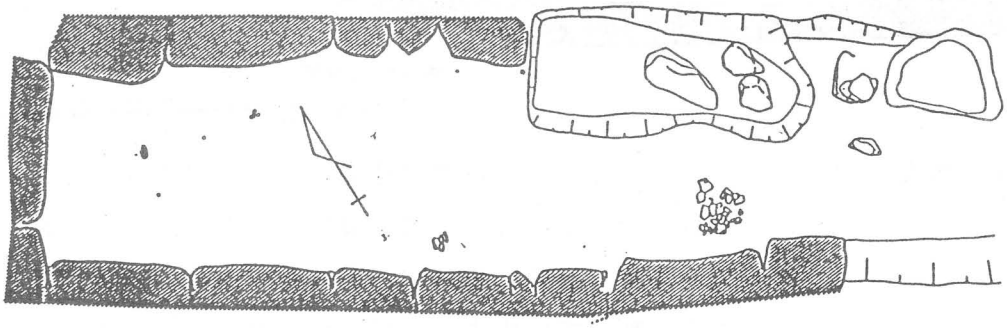
石室の床面状況　　玄室の床面には、板石を敷いています。羨道部分には、敷石はなく掌大～人頭大の石を充満させた閉塞石がありました。遺物は、玄室の北西隅に須恵器の蓋と坏が口を合わせた状態で出土しています。

4号墳

墳丘と石室　　幅2m の溝が帆立貝の形に巡っており、帆立貝式古墳の可能性があります。

石室は、東に開口し、左側に袖がある横穴式石室です。この古墳も盗掘を受けており、石材は、1段分しか残っていませんでした。天井石はまったくなく、羨道の左側石は、一石だけ残し抜き取られていました。

石室の床面状況　　床面は、地山を平坦に削ったもので、玄室の中央奥壁よりに耳環（耳飾り）2個、袖石があったあたりに1個（銀環）、右側壁に沿うように鉄製刀子が1点出土しています。羨道からは、須恵器の甕や坏短頸壺の破片が固まって出土しました。



高塚山4号墳
石室平面図　（石室の床面を上から見た図）

5号墳

墳丘と石室　　3号墳と同じく4号墳の墳丘裾を削って築造しています。後世の攪乱によって大きく削られ、石室を造るために掘った穴と石材が抜き取られた痕跡が残っていただけでした。須恵器の破片が僅かに出土しました。

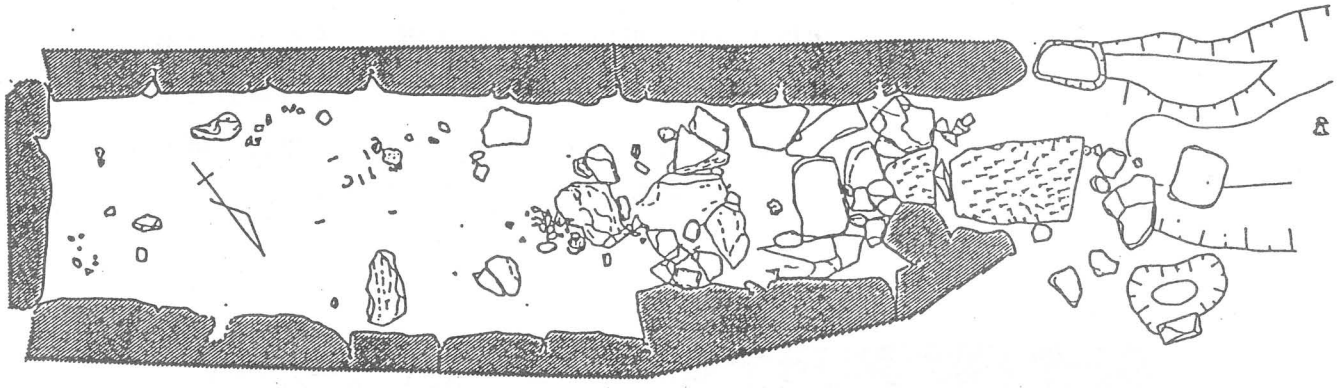
6号墳

墳丘と石室

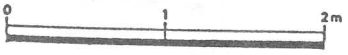
6号墳は、円墳で、東西に幅約2mの溝を巡らせています。頂部には大きな窪みがあり、盗掘を受けていることがすぐに分かりました。

埋葬施設は、凝灰岩を使用した横穴式石室で、奥壁から開口部に向かって、右側に袖石を置いています。袖石は石を縦に使用しています。この石を境に普通、遺体を納める玄室と、玄室への通路である羨道に分かれています。この石室の左側壁（南側）は真っ直ぐに造られていますが、右側壁は、袖を造るためにやや湾曲させ、北側へ出っ張っています。

石室の石の積み方は、乱雑に積まれ、玄室を3段、羨道を2段に積んでいます。天井石はすべて失われていました。石面には、わずかに工具による調整がみられます。



高塚山6号墳
石室実測図



石室の床面状況

横穴式石室は、複数の埋葬（追葬）ができることが特徴ですが、この古墳も最低2回の埋葬が行われています。最初に埋葬が行われた床面は、羨道だけに石を敷いています。注目されるのは、羨道の入口の板石が他の石より大きく、のみ状の工具で丁寧に面を整えています。この石の東側には、板石を縦に埋め込んでいます。まわりには、壺や坏などの須恵器が出土しています。玄室からは、鉄釘や馬具などの鉄製品の破片や、須恵器の蓋坏や高坏などが出土しています。

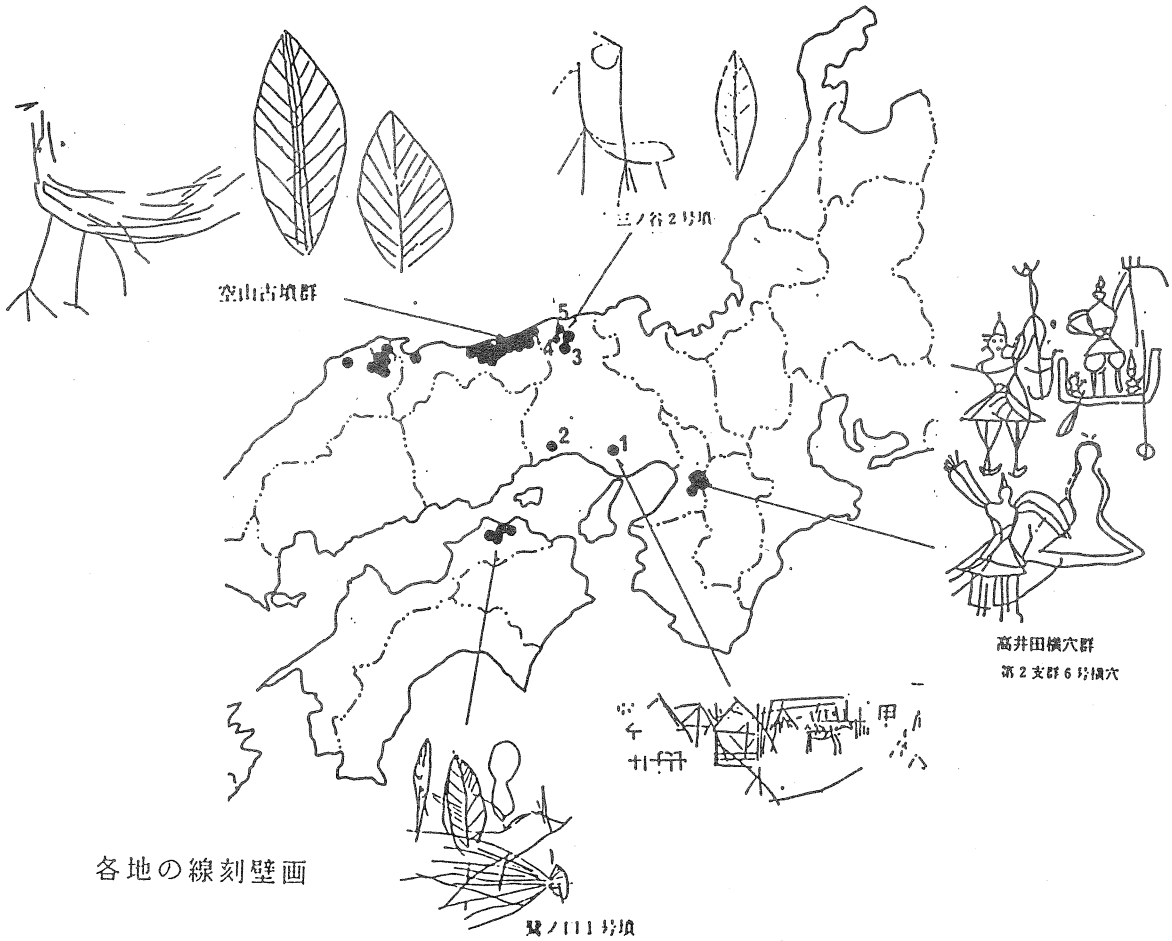
追葬が行われた床面は、最初の床面の上に0.15mほど土を盛ってます。床面からは鉄釘片が出土しています。

4．まとめ

発掘調査された古墳の築造時期は、現在調査中でもう少し検討が必要ですが、概ね、6号墳は、6世紀後半ごろ、4号墳は6世紀後半から末ごろ、2号墳・3号墳は6世紀末ごろと考えられます。

高塚山古墳群は、古くから知られていましたが、その実態は今回の調査が行われるまでよくわかりませんでした。

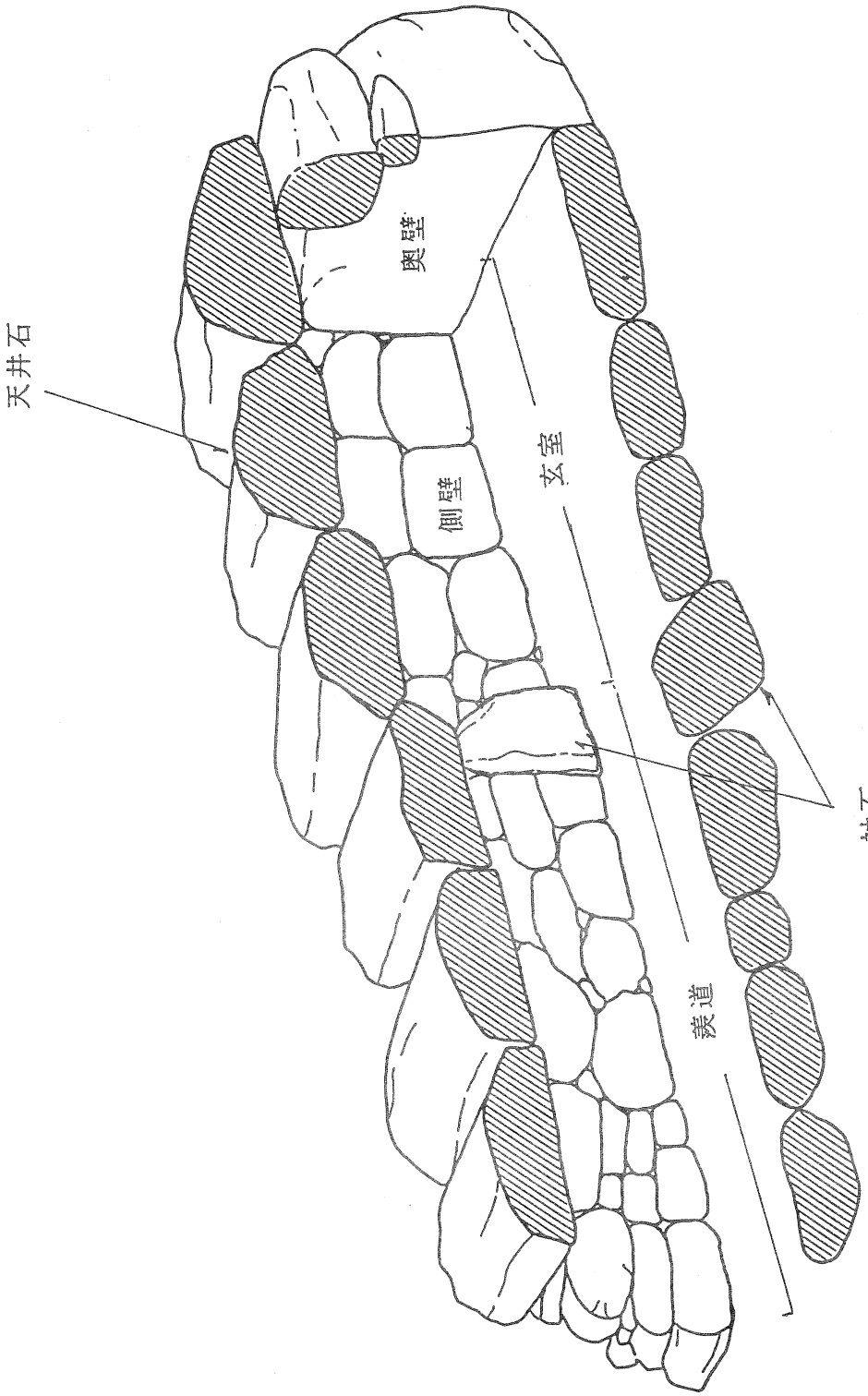
特に線刻壁画のある古墳の発見は、神戸市では初めてです。兵庫県下でも、今回のもので5例目と非常に珍しいものです。線刻壁画古墳は、九州、関東、山陰地方に多く瀬戸内地域での発見は少なく、この地域の線刻壁画古墳を考えるうえで貴重な発見となりました。



各地の線刻壁画

表－2
兵庫県下の線刻壁画を持つ古墳一覧

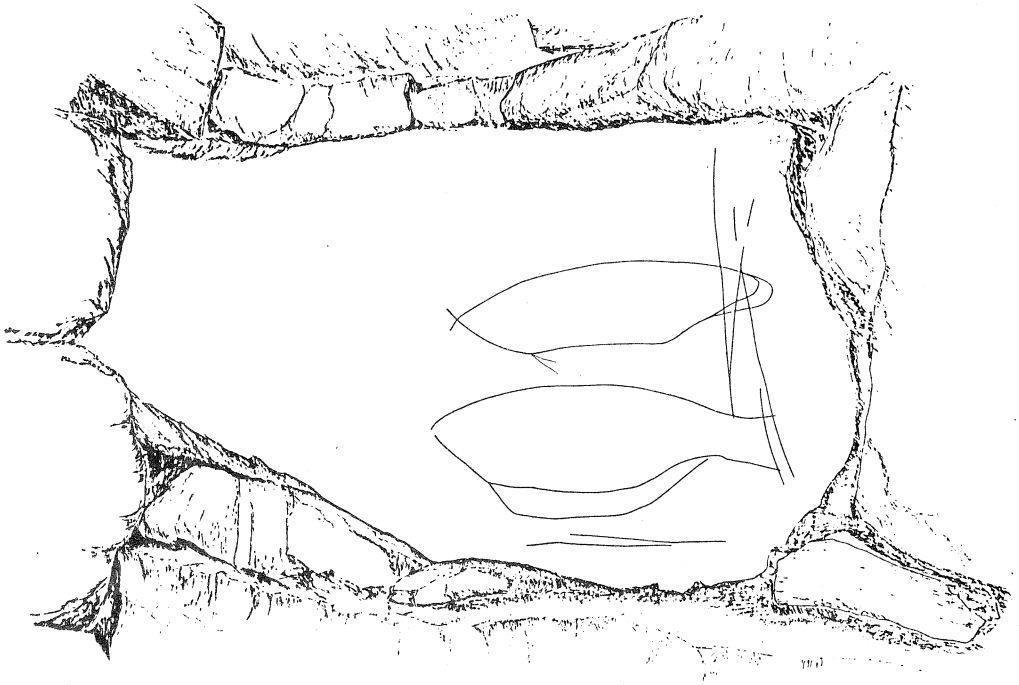
	古墳名	所在地	絵の内容	備考
1	高塚山2号墳	垂水区多聞町	馬など	
2	緑ケ丘2号墳	相生市	魚	
3	三の谷1号墳	美方郡村岡町	二羽の鳥	県指定
4	三の谷2号墳	美方郡村岡町	騎馬像・鹿・三角文	町指定
5	神なし古墳	美方郡村岡町	鳥	



横穴式石室構造図

高塚山古墳群

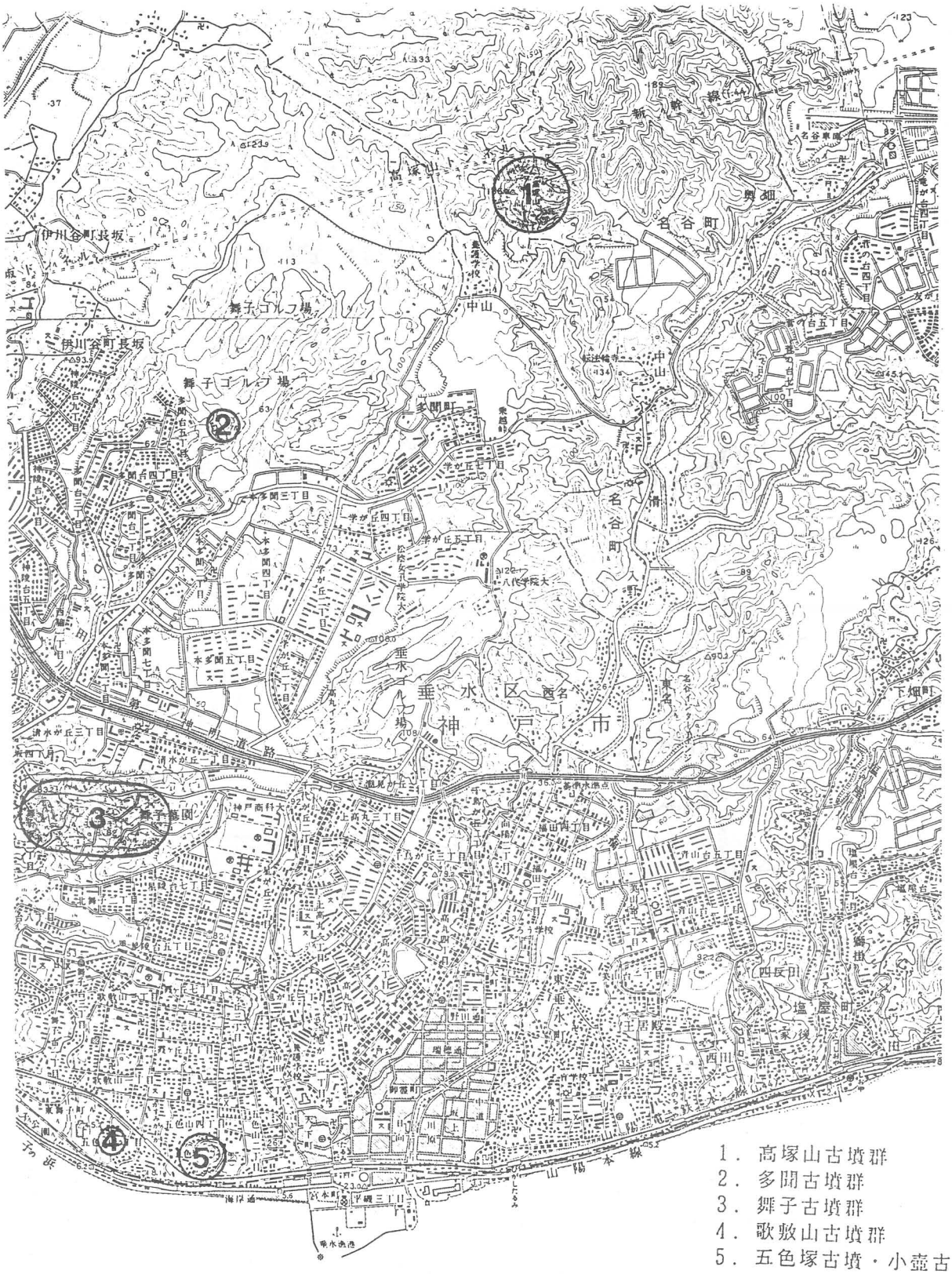
現地説明会資料



神戸市教育委員会
平成４年３月８日

1. はじめに

垂水区多聞町字小束山（こつかやま）に所在する高塚山（たかつかやま）古墳群は福田川と伊川に挟（はさ）まれた丘陵上に存在しています。



1．高塚山古墳群
2．多聞古墳群
3．舞子古墳群
4．歌敷山古墳群
5．五色塚古墳・小壺古墳

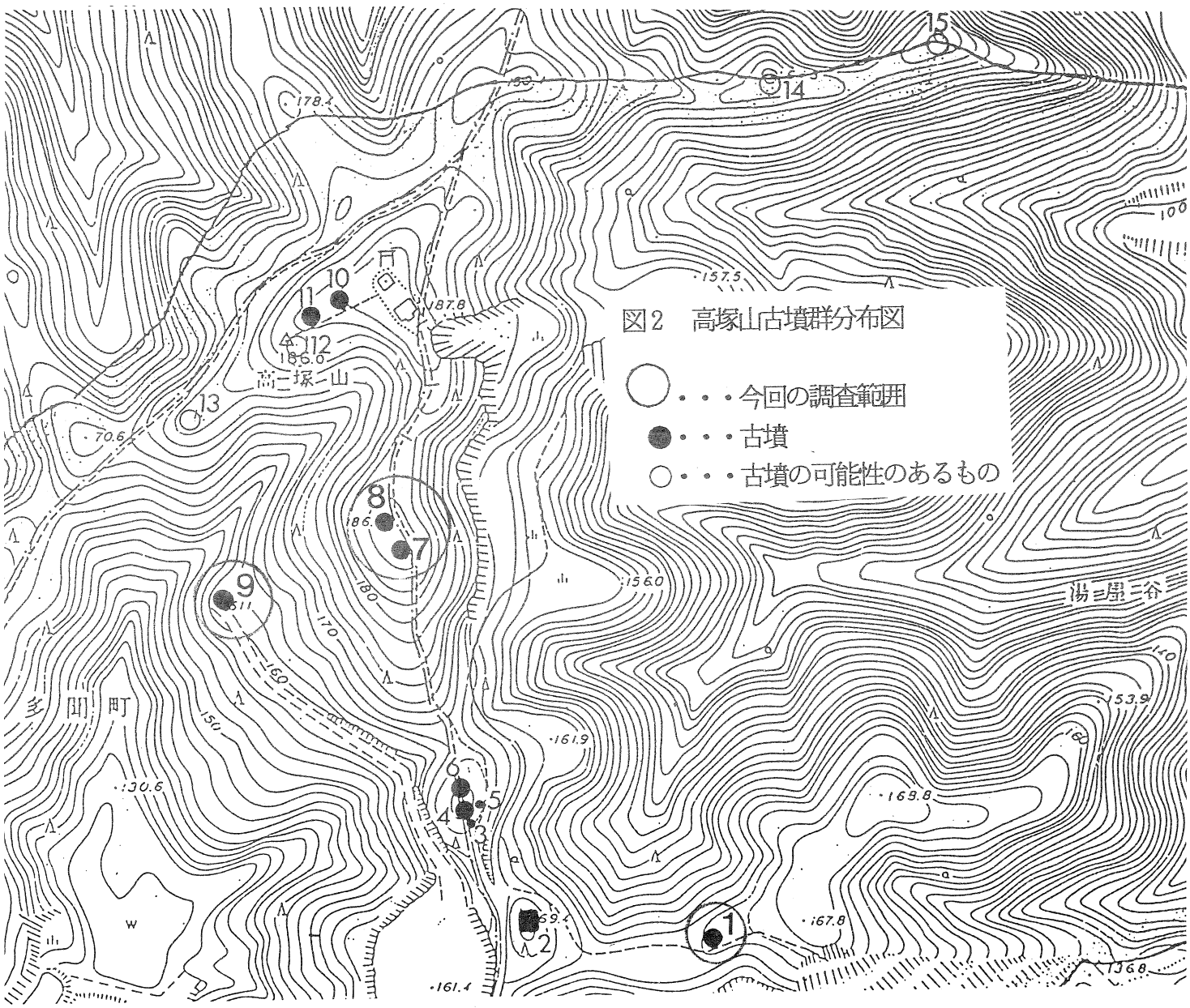
図1　高塚山古墳群と周辺の古墳

この古墳群には、分布調査や試掘調査によって15基程度の古墳があることがわかっています。

平成３年３月１日から実施した第１次調査では、２号墳から６号墳までの５基の古墳の発掘調査を行いました。

この発掘調査で、高塚山古墳群は６世紀の後半から終末にかけて築造されたことが判明しました。また、２号墳では市内で初めての線刻壁画の施された横穴式石室が発見されました。この線刻壁画は玄室の一石に馬の絵や意味不明の絵が描かれていました。

今回の二次調査は、平成３年12月３日から発掘調査を実施しています。



2. 調査の概要

1号墳

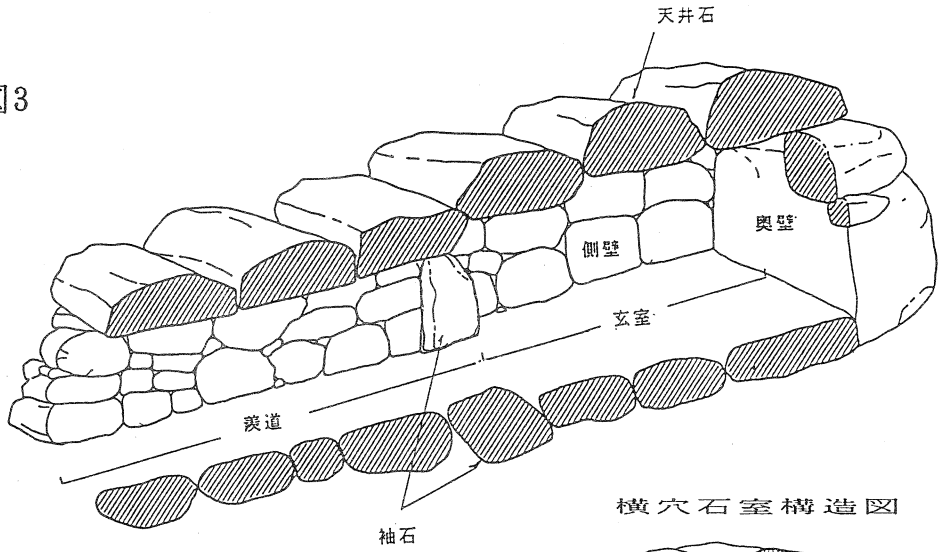
墳丘　1号墳は、東西12m・南北17mの楕円形の古墳です。

石室　1号墳の石室は、両袖式で、南西に開口していますが、神戸市内では今までに例のない構造のものであることがわかりました。

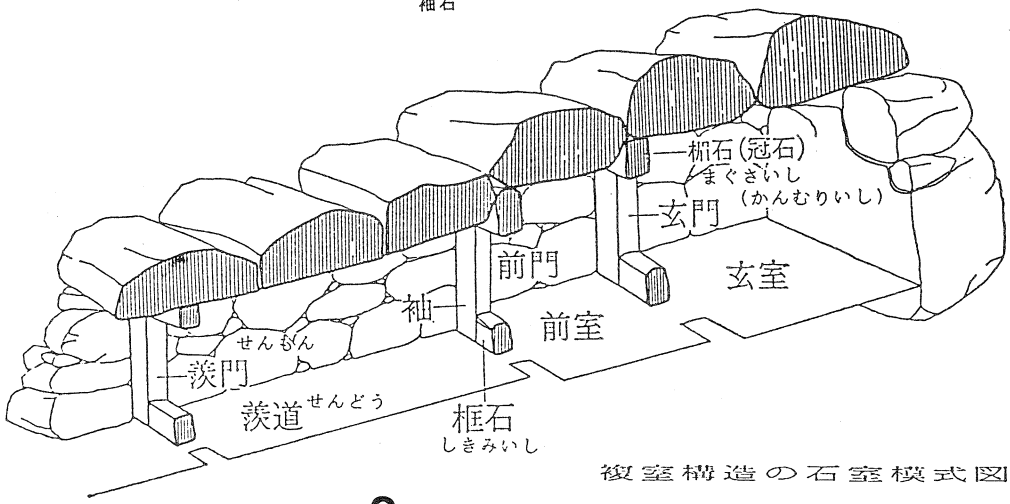
近畿地方のほとんどの横穴式石室は、玄室とその通路である羨道とに分かれていますが，1号墳の石室は、石室入口から玄室までの間に、左の側壁が約1.5mにわたり約15cmほど広く造られた箇所があります。この部分は奥の玄室の前の部屋「前室」と呼ばれるものと考えられます。

この石室は玄室、前室、羨道に分かれた複室の構造をした石室と言うことができます。

図3



横穴石室構造図



複室構造の石室模式図

また、玄室は横幅が奥行より長い形のもので「T字形」の石室と呼ばれるものです。

石室の床面状況　玄室の床面には、部分的に凝灰質砂岩の板石を敷いています。

副葬品　副葬品は、須恵器の小型の提瓶・坏・坏蓋、鉄製の直刀の破片が発見されました。

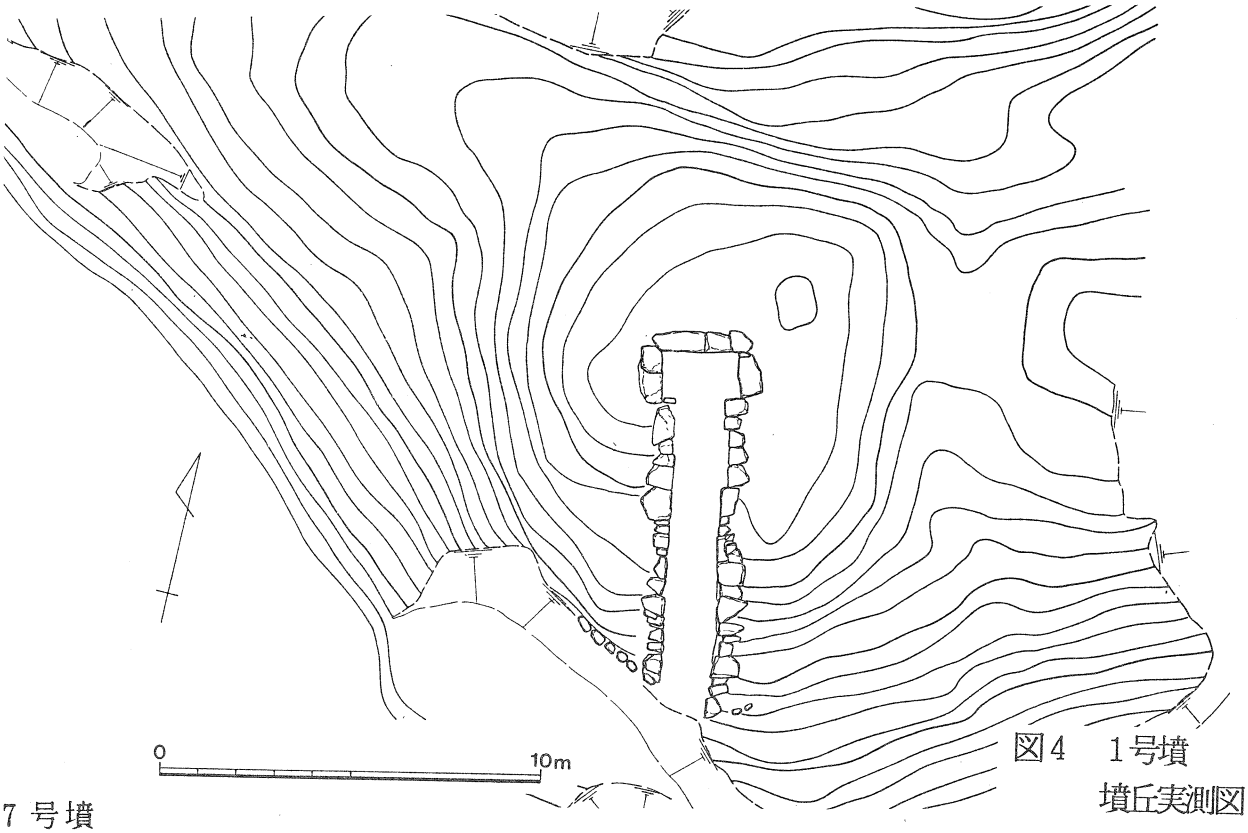


図4　1号墳
墳丘実測図

7号墳

墳丘　7号墳は、東西13m・南北17mの楕円形の古墳です。墳丘の南側で、墳丘の裾に人頭大の石を巡らせている（外護列石）のが確認されました。石室の入口の左右で確認されましたが、一周していたかどうかは不明です。

石室　埋葬施設は、凝灰質砂岩を使用した横穴式石室で、奥壁から開口部に向かって、右側に袖石を置いています（右片袖式）。袖石は石を縦に使用しています。

7号墳では、羨道部に石室の出入りを塞ぐための石（閉塞石）が置かれています。ふつう閉塞石は，一人の人が持ち運びできる程度の石を使用していますが、7号墳では、非常に大きな石を使用しています。

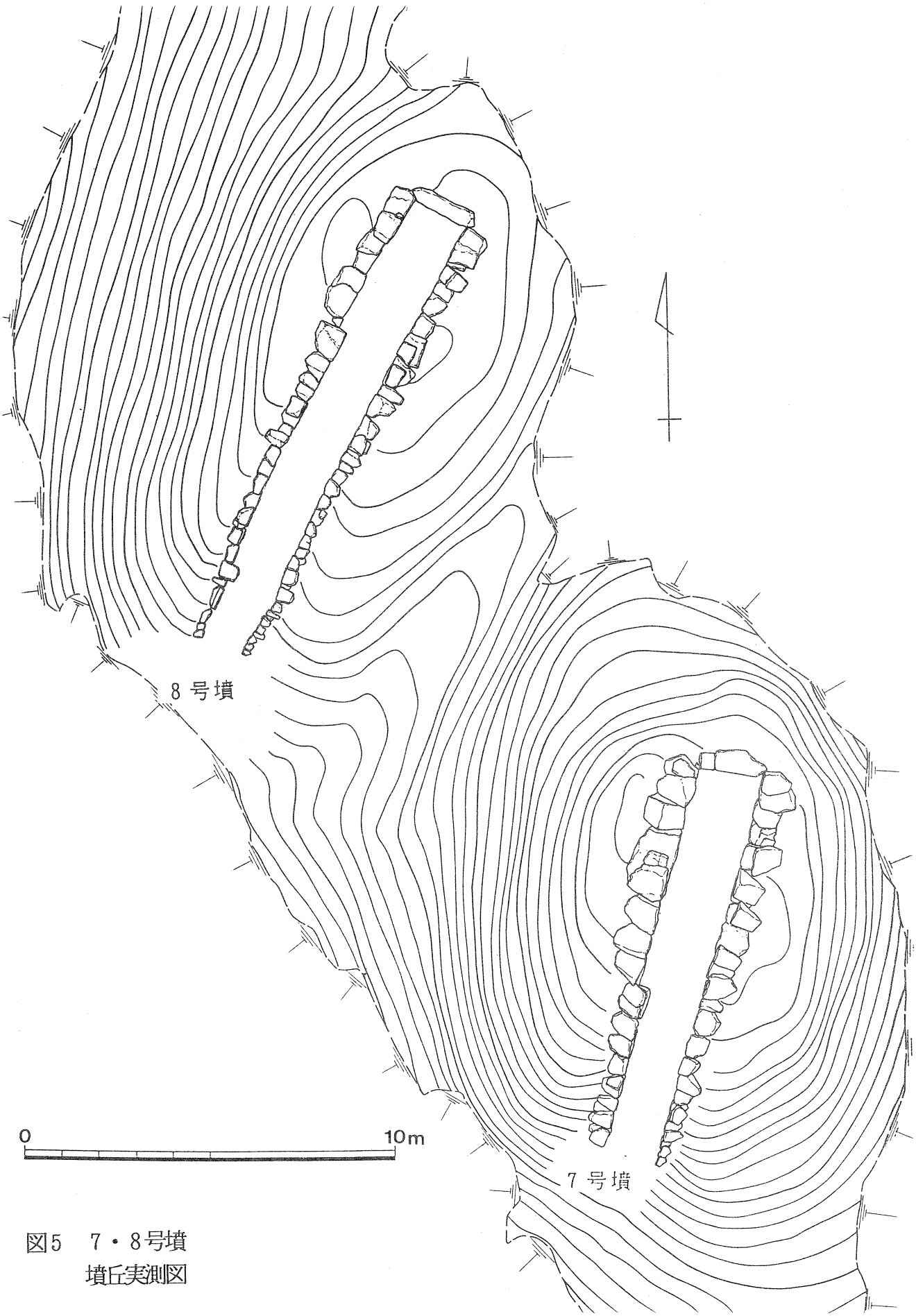


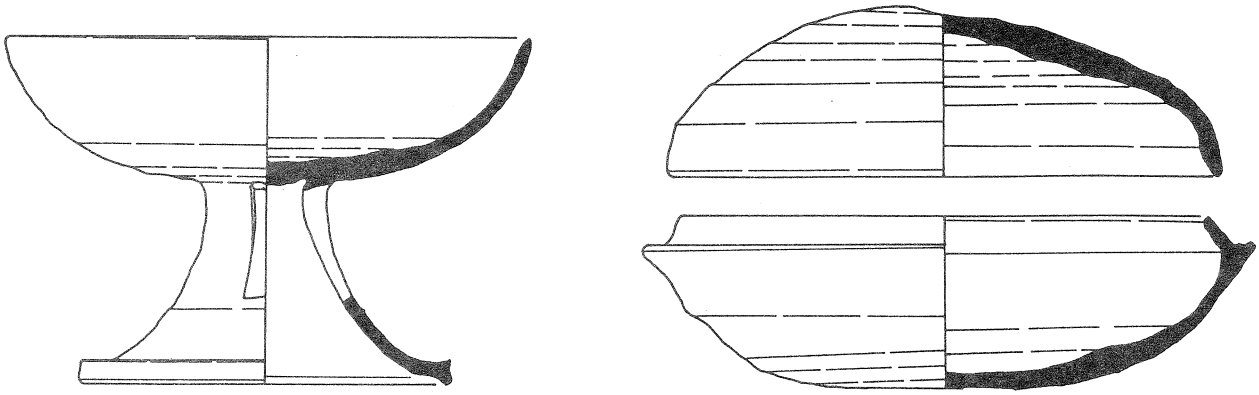
図5　7・8号墳
墳丘実測図

また、玄室内に水が溜まらないように排水溝が造られています。

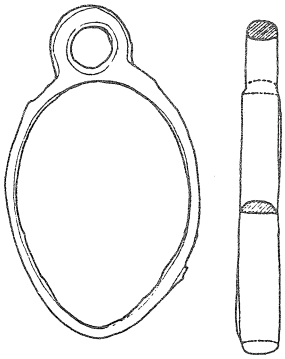
石室の床面状況　石室の床面には、凝灰質砂岩の板石を敷いています。複数の埋葬（まいそう）が行われているようで、板石の上と下に分かれて遺物が出土しています。

副葬品　玄室からは、鉄釘（てつくぎ）や馬具（ばぐ）などの鉄製品の破片や、須恵器の平瓶（へいへい）や坏・高坏などが出土しています。

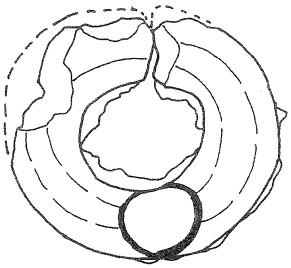
羨門部からは平瓶や高坏がほとんど原型を保って出土しました。



S＝1／2



鞘金具



耳環（金環）

S＝1／1

図6　7号墳出土遺物実測図

6

8号墳

墳丘　8号墳は、東西11m・南北17mの楕円形の古墳です。

石室　8号墳の石室は、右片袖式で、南西に開口していますが、1号墳と同じく複室の石室の構造のものであることがわかりました。

この石室は、石室入口から玄室までの間に左右の側壁に、二ケ所、袖石と同じように石を立てているのが確認されました。立てられた石と石のあいだは、一つの室を意識して造ったものと思われます。立てられた石によって区画されたそれぞれの室を玄室、前室、羨道と呼ばれる構造の石室だとおもわれます。

また、この石室は、全長が13・3 mあり、市内で最も長い横穴式石室です。

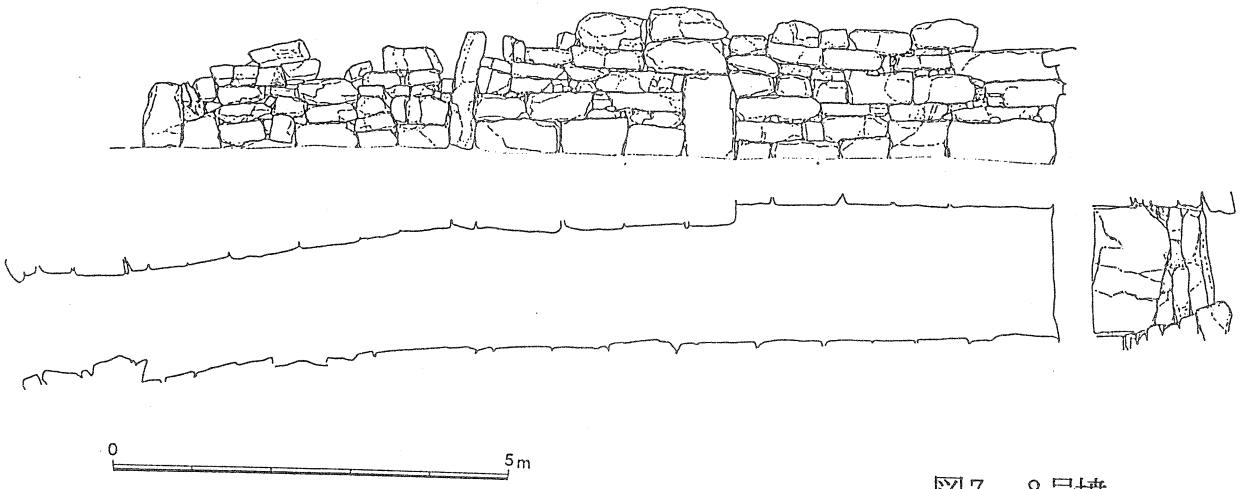


図7　8号墳
横穴式石室実測図

石室の床面状況　玄室の床面には，凝灰質砂岩の板石を敷いています。この敷石や奥壁・側壁の一部には火熱を受けて赤く変色した箇所や、火熱を受けて石が割れた所が発見されました。調査の結果、ここで人を火葬したためであることが判明しました。

火葬された人は、5人以上と考えられます。焼かれた位置は，木棺の置かれていた部分が火熱によって敷石や床面が変色しているうえに、骨が集中して出土することからわかります。

耳環（耳飾り）や玉などの装飾品は身につけた状態で火葬されたようで、火葬骨と共に出土しています。

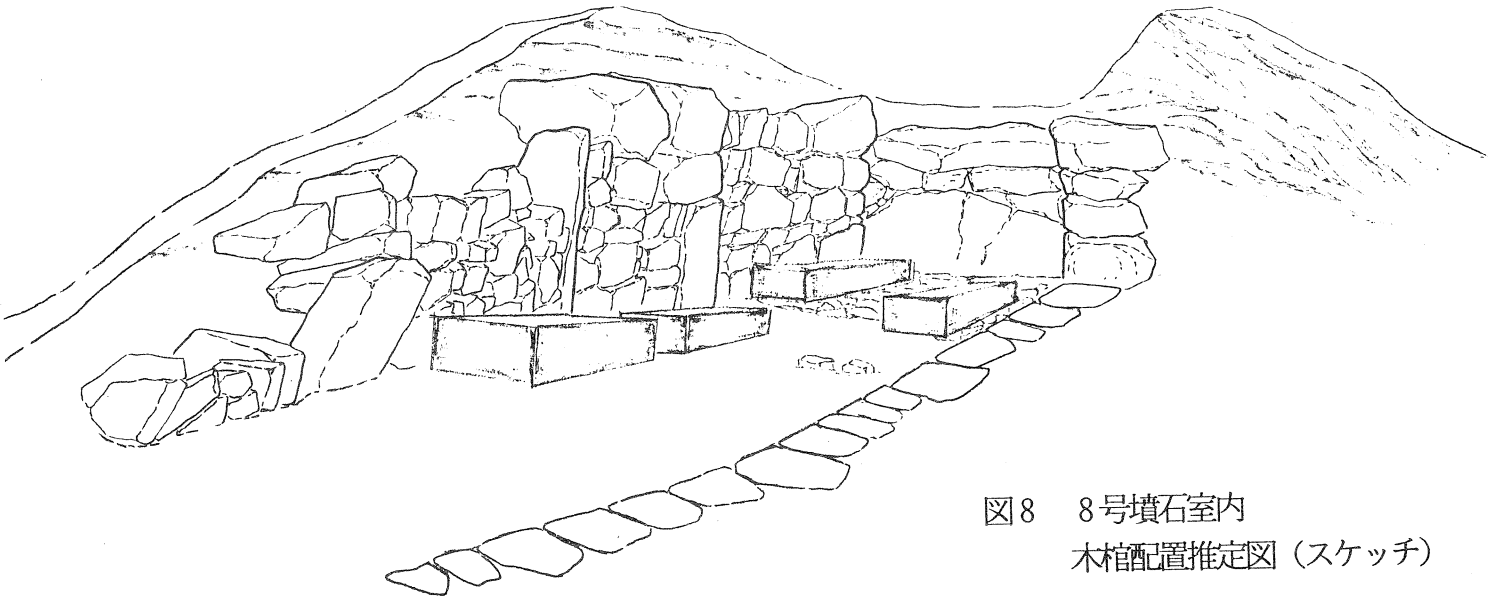


図8　8号墳石室内
木棺配置推定図（スケッチ）

副葬品　　副葬品は、須恵器の壺・土師器の坏や釘・馬具などの鉄製品の破片が発見されました。

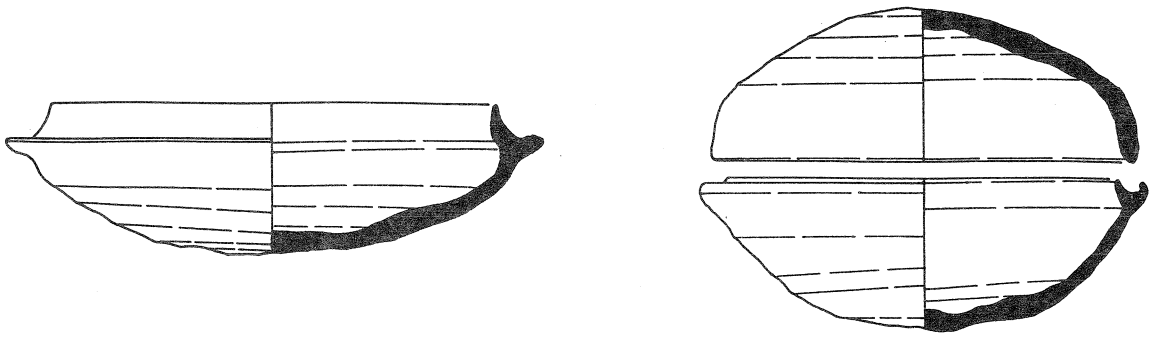


図9　8号墳出土　S＝1／2
遺物実測図（1）

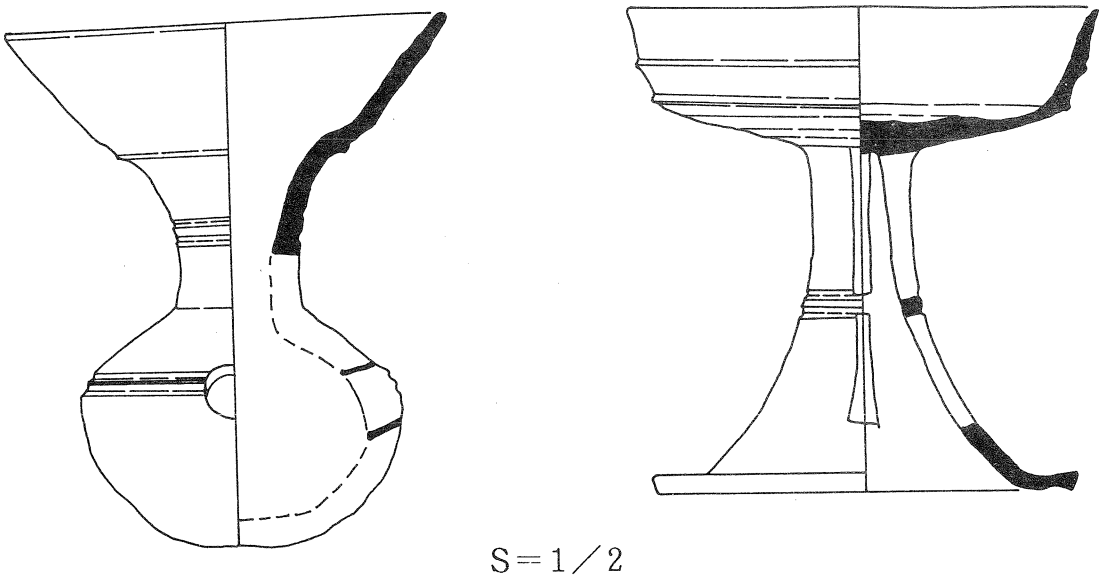


図10　8号墳出土
遺物実測図（2）

9号墳

墳丘
石室

東西13m・南北15mの楕円形の古墳で、東に堀が掘られています。石室は、南に開口した右片袖式の横穴式石室です。

また、玄室の左側壁（東側）の一石には、魚の絵が刻まれています。

石室の床面状況

玄室の床面には、板石を敷いていました。盗掘を受けており、床面から出土した遺物は、敷石の隙間（すきま）に落ち込んでいた2点の耳環（耳飾り）だけでした。

また、7号墳と同様に排水溝が造られていました。そして、羨道から石室外へ幅2mの墓道が掘られていました。

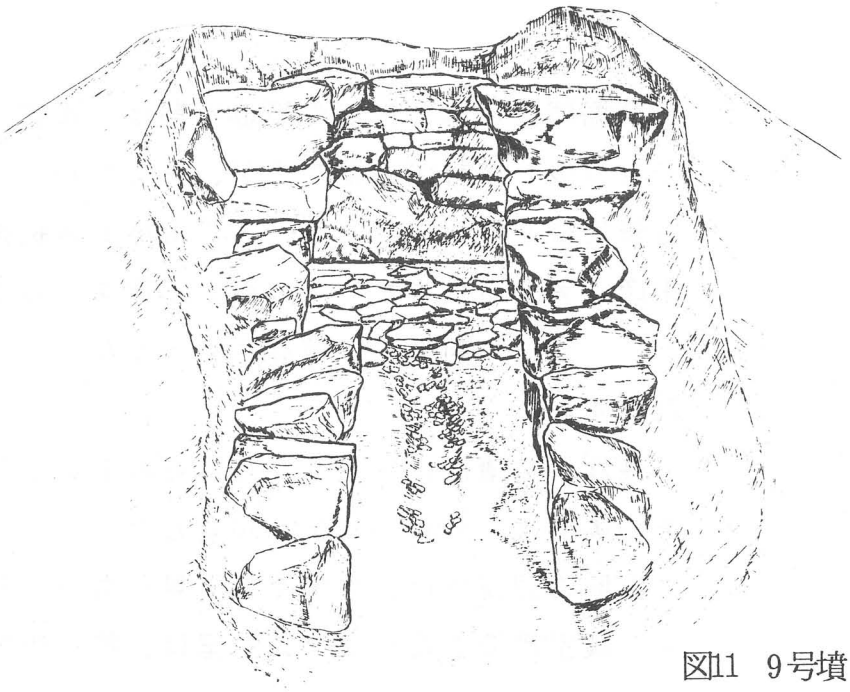


図11　9号墳　（スケッチ）
墳丘と石室

線刻壁画

線刻は、非常に細い繊細な線で描かれています。魚は上下に2 匹描かれています。双方とも頭を左にして描かれています。

下の魚は、右端に尾鰭（おびれ）が表現され、その下には鰭（ひれ）を表現したと思われる弧線が描かれています。

上の魚は、尾鰭の表現が不明ですが，胸の付近に鰭を表現した箇所があります。

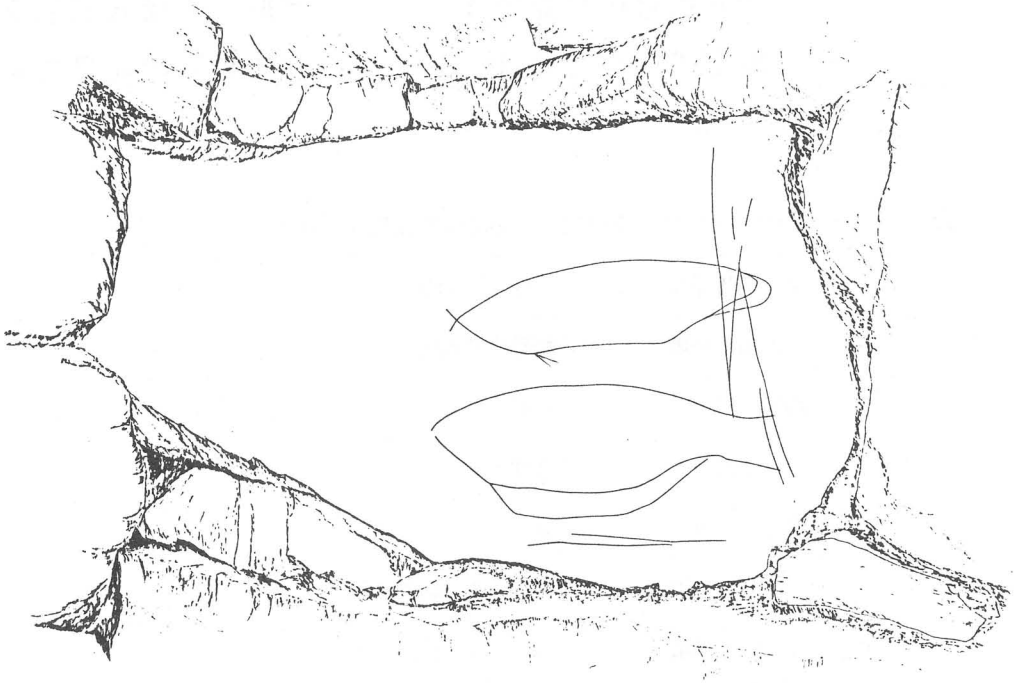


図12　9号墳　線刻壁画（魚）
（スケッチ）

3. まとめ

発掘調査された古墳の築造時期は、現在、調査中でもう少し検討が必要ですが、おおむね、1・7・9号墳は6世紀後半ごろ、8号墳は6世紀後半から末頃と考えられます。その後，追葬（ついそう）を行っていますが、7世紀の前半には追葬されなくなったと考えられます。

高塚山古墳群は、古くから知られていましたが、その実態はよくわかりませんでした。

今回の調査では、数多くの発見がありました。まず、複室構造を持つ横穴式石室は、神戸市では初めての発見です。兵庫県下では、9例目の発見になります。

また、横穴式石室で行われた火葬も、神戸市では初めての発見です。兵庫県下でもまだ2例目となるものです。

線刻壁画のある古墳の発見は、当古墳群において昨年の馬に次いで、市内で2例目となりました。しかし、いまだ県下では6例目と珍しいものです。

「T字形」の石室は神戸市内で2例目、兵庫県下で6例目の発見ですが、「T字形」の横穴式石室で複室構造のものは、近畿地方で初めての発見です。

表1　兵庫県のT字形の横穴式石室

	古墳名	所在地
1	丁山頂1号墳	姫路市勝原区丁
2	飾東1号墳	姫路市
3	小丸山古墳	御津町中島
4	稲荷山古墳	篠山町
5	毘沙門1号墳	神戸市垂水区舞子坂
6	高塚山1号墳	神戸市垂水区多聞町

調査については東候物産株式会社、冨島建設株式会社の御協力を得ています。

また、神戸市文化財専門委員の和田　晴吾、檀上　重光両先生および、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　田中　琢センター長、奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館　猪熊兼勝　学芸室長の御指導を得ました。

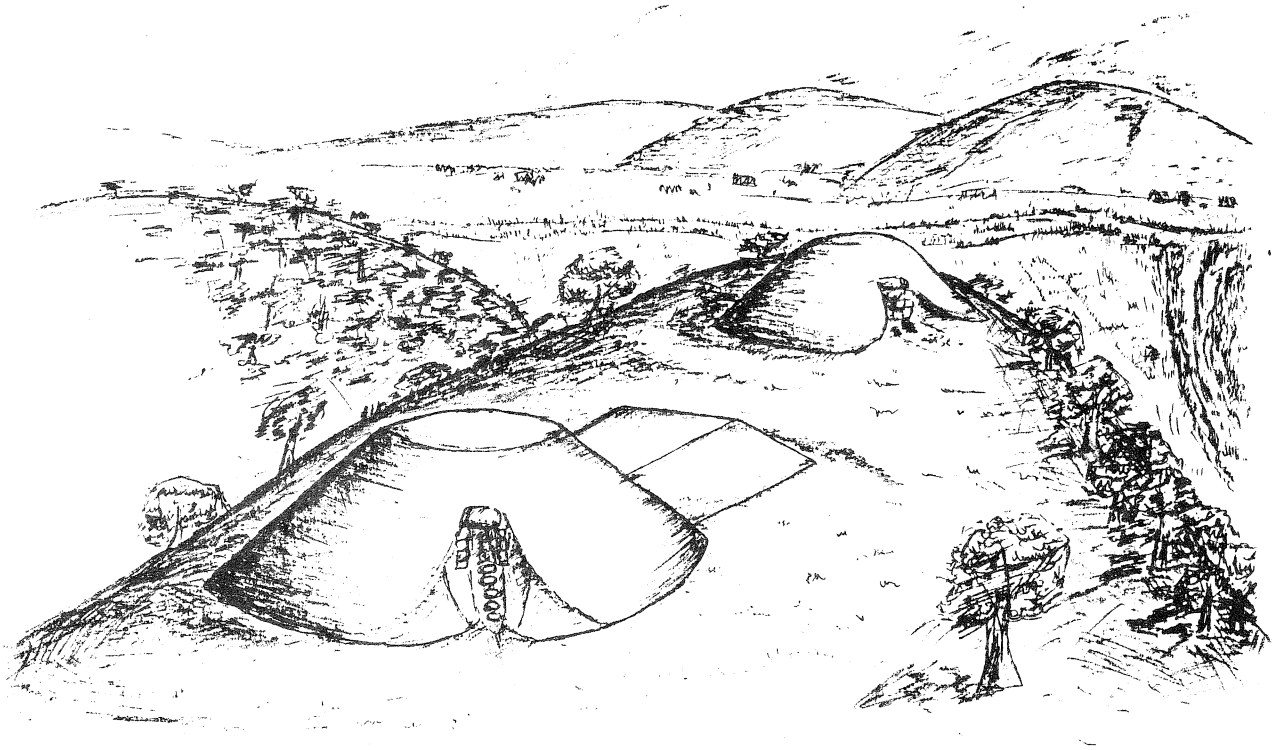
（表紙　高塚山８号墳　線刻壁画　スケッチ）

高塚山古墳群　一覧表

古墳名	墳形	墳丘規模	墳丘高（現高）	埋葬施設	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高（現高）	羨道幅	羨道長	羨道高（現高）
高塚山1号墳	楕円形	東西 12m 南北 17m	(2.5m)	横穴式石室 T字形の玄室 （複室構造）	9.6m	1.4m	1.9m	(1.1m)	1.2m	6.0m	(1.3m)
						前室長	前室幅	前室高			
						1.5m	1.3m	(1.1m)			
高塚山2号墳	方形	東西 11m 南北 12m	(1.6m)	横穴式石室 右片袖式	6.8m	3.4m	1.4m	(1.7m)	1.2m	3.3m	(1.3m)
高塚山3号墳	不明	不明	不明m	横穴式石室 無袖式	3.2m	2.0m	1.1m	(0.7m)	0.9m	1.2m	(0.3m)
高塚山4号墳	帆立貝式古墳？		(1.9m)	横穴式石室 左片袖式	5.8m	2.9m	1.2m	(0.8m)	0.8m	2.9m	(0.6m)
高塚山5号墳	不明	不明	不明	横穴式石室	不明	0.5m	0.9m	不明	不明	不明	不明
高塚山6号墳	円墳	東西 12m 南北 11m	(1.8m)	横穴式石室 右片袖式	7.0m	3.4m	1.3m	(1.7m)	1.1m	3.5m	(1.1m)
高塚山7号墳	楕円形	東西 13m 南北 17m	(4.5m)	横穴式石室 右片袖式	10.7m	6.7m	1.7m	(2.6m)	1.4m	4.5m	(2.2m)
高塚山8号墳	楕円形	東西 11m 南北 17m	(2.5m)	横穴式石室 右片袖式 （複室構造）	13.3m	4.1m	1.5m	(1.8m)	1.3m	5.5m	(1.5m)
						前室長	前室幅	前室高			
						3.7m	1.4m	(1.8m)			
高塚山9号墳	楕円形	東西 13m 南北 15m	(3.5m)	横穴式石室 右片袖式	8.6m	5.2m	1.7m	(2.3m)	1.4m	3.4m	(2.0m)

北神第２地点古墳・第３地点古墳

現地説明会資料



平成４年３月２２日

神戸市教育委員会
(財) 神戸市スポーツ教育公社

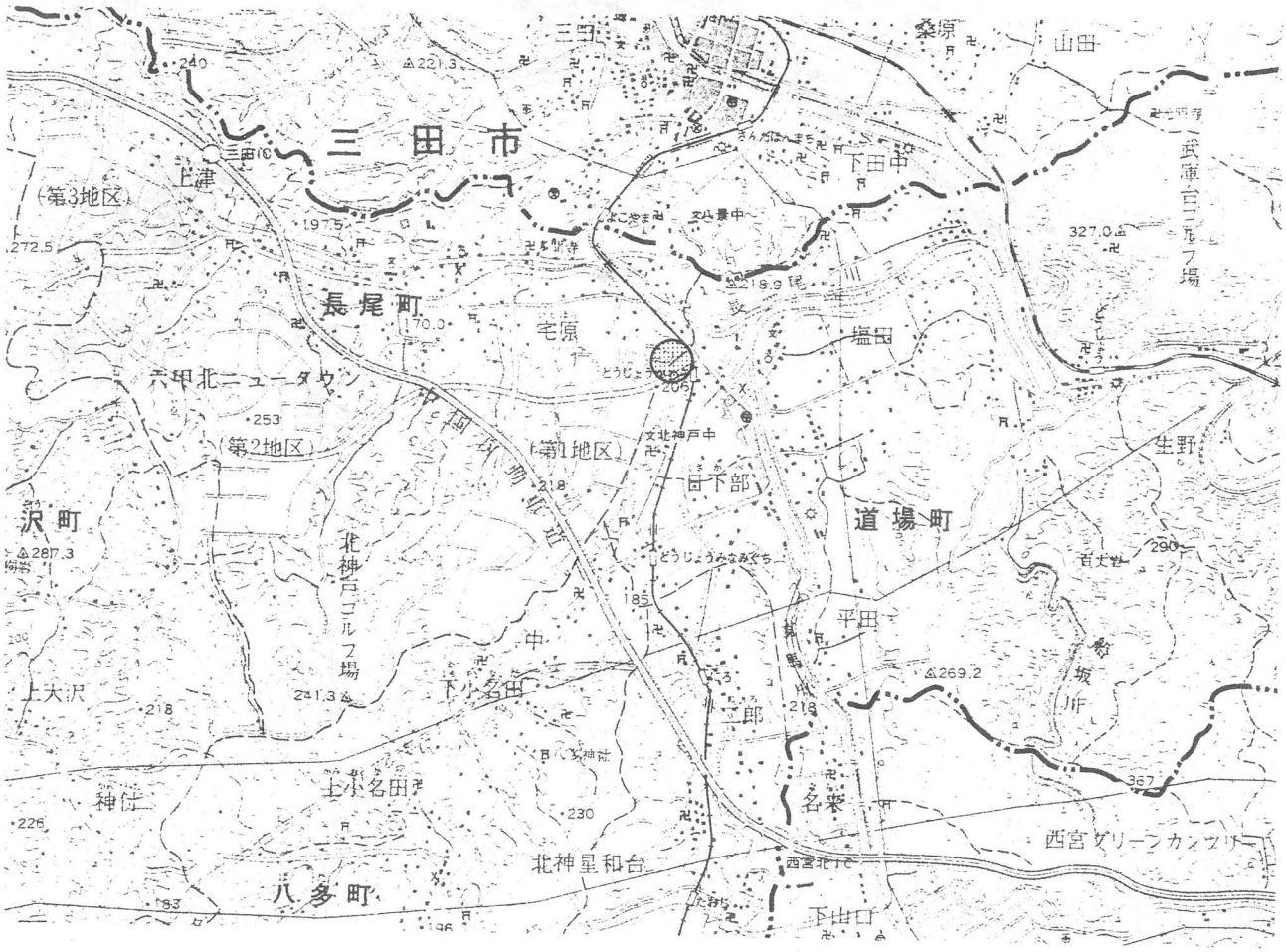
１．はじめに

北神第２地点・第３地点の２基の古墳は、北神三団地の建設に伴う分布調査によって、その名称が付けられました。

北神三団地の区域内では、昭和54年（1979年）より発掘調査を行っています。これまでに、第一地区内（現在の鹿の子台）で、古墳時代後期の竪穴式石室を埋葬施設とする古墳（第13地点古墳）、横穴式石室を埋葬施設とする古墳（第35地点古墳）や木棺直葬をしている第９地点１号墳（方墳）・２号墳（円墳）などの４基が発掘調査されました。そのほか、弥生時代の集落址（第４地点遺跡）や室町時代の火葬址（第46・47地点遺跡）などの多くの遺跡が明らかになってきました。

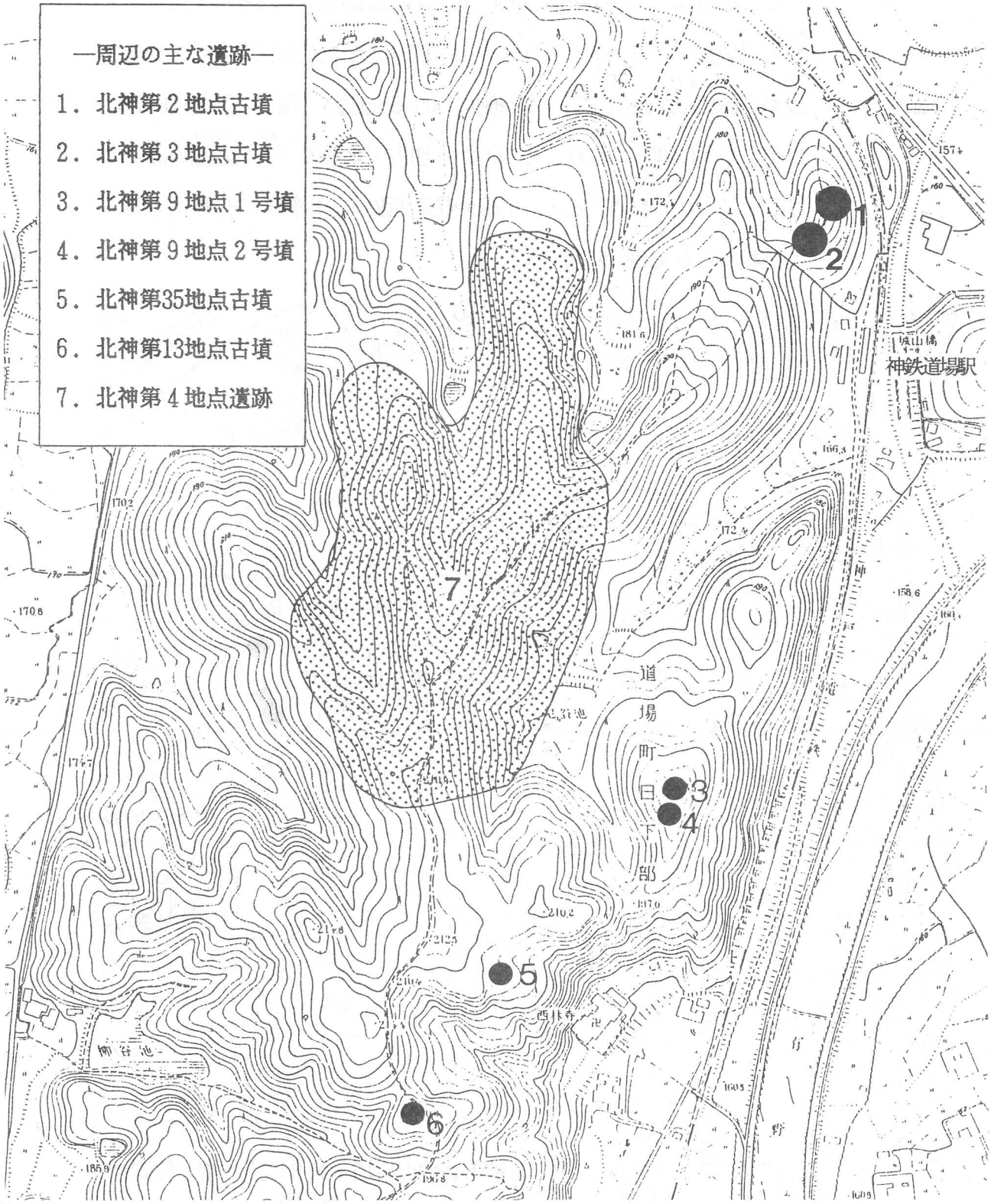
第９地点１号墳・２号墳と第４地点遺跡の一部は、現地で保存されています。また、第13地点古墳の石室は鹿の子台小学校内に移築されています。

また、道場町・長尾町一帯では近年の圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、多くの遺跡が見つかっています。



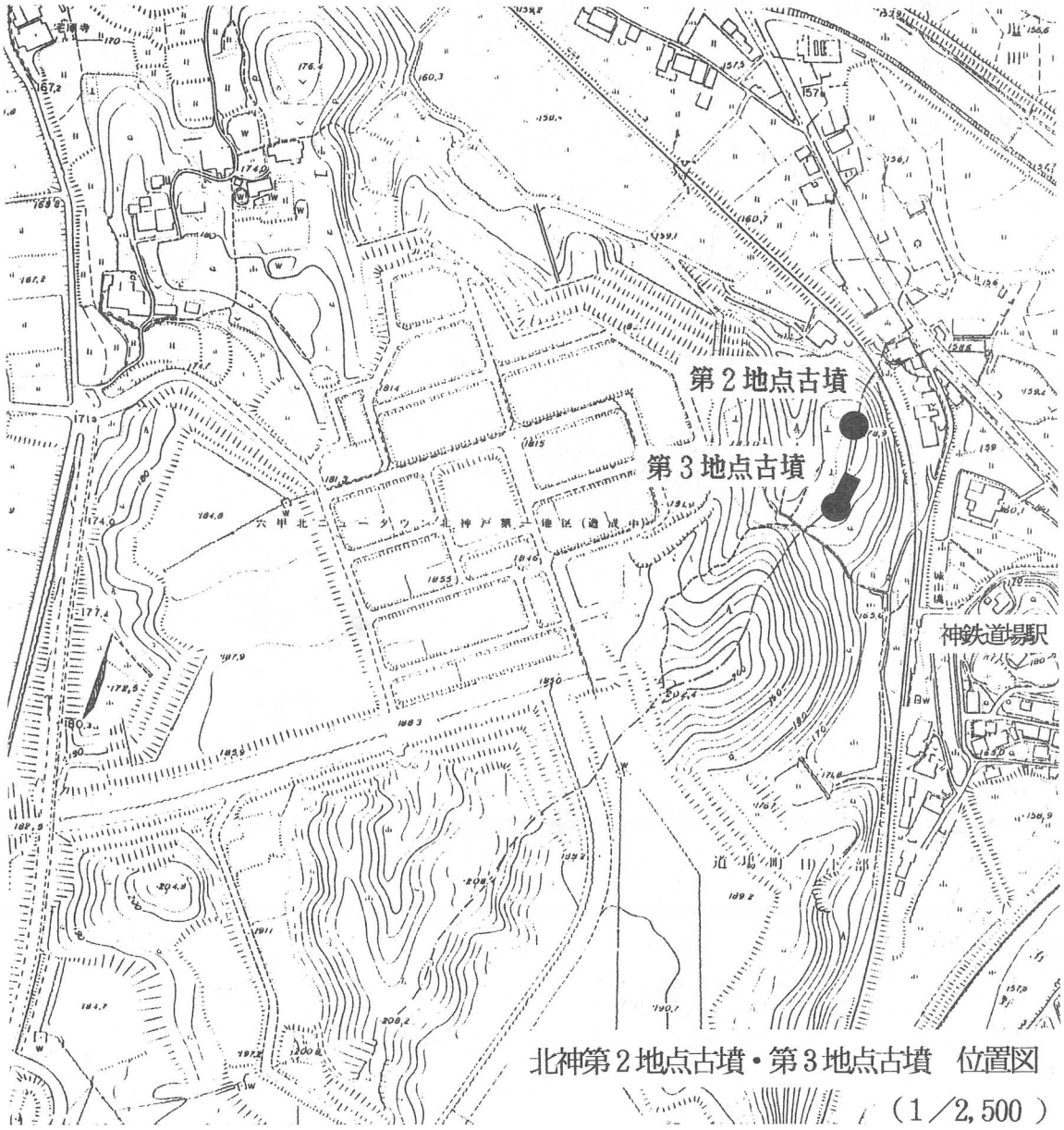
位置図　（１／50,000）

２．調査の経過　　北神第２地点と第３地点のふたつの古墳は、整備・保存されることになりました。このため、古墳の形状や規模、築造の時期など基礎的な資料を得るために、昨年３月～５月に２基の古墳の墳丘を確認するための試掘調査を行いました。そして、今年１月から第２地点古墳の石室の調査を行っています。

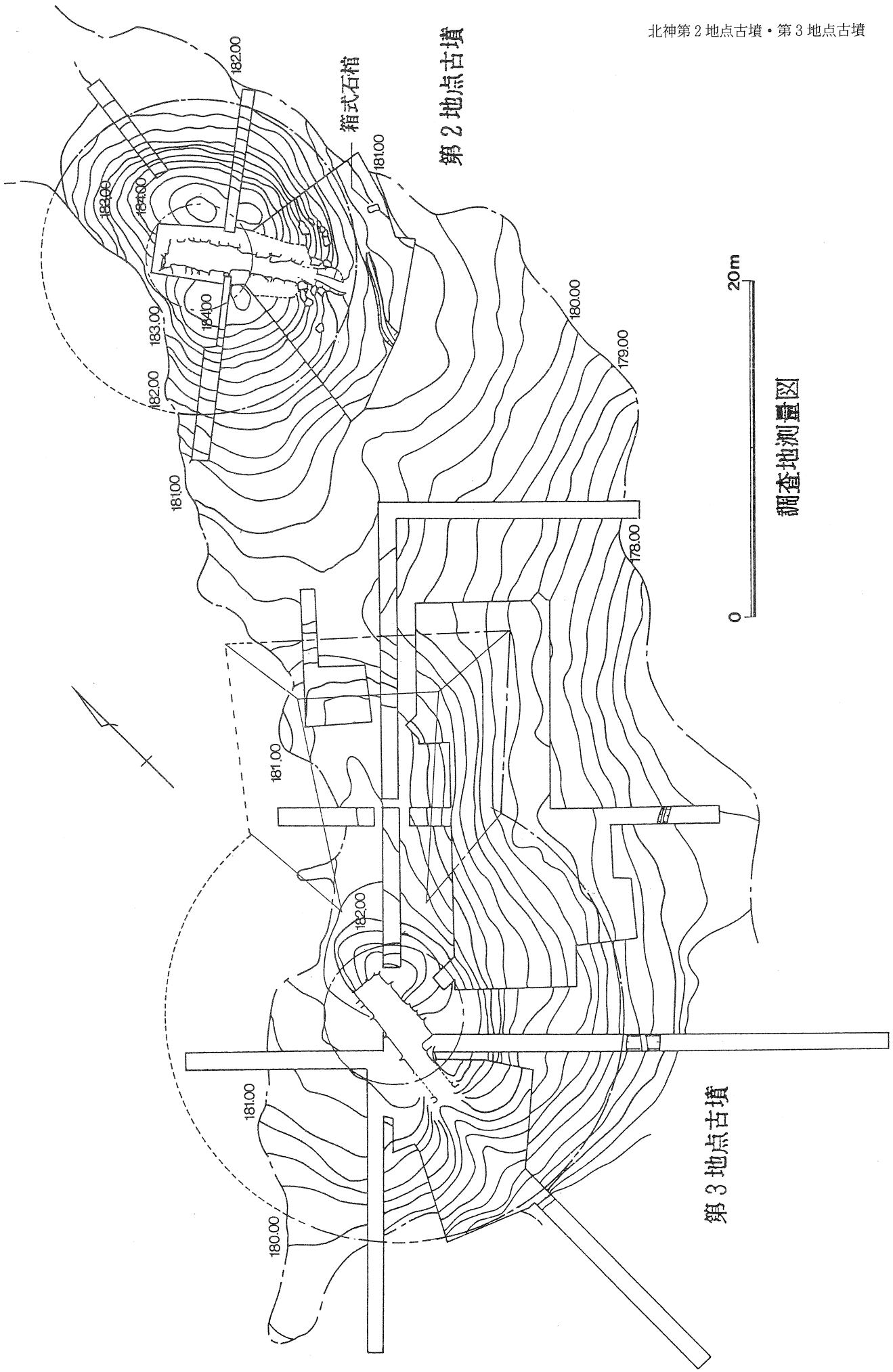


３．立　　地　　北神第２地点古墳・第３地点古墳は六甲山系北側の神戸市北区八多町・道場町・長尾町に広がる標高200m前後の丘陵の先端尾根上に立地します。北神第２地点古墳のほうが尾根の先端側につくられており、両古墳の間隔は約15mです。両古墳とも尾根上の原地形を利用してつくられ、平地からの標高差は約20mです。

ここからは、六甲山系の北側に源を発する長尾川・八多川・有野川・有馬川が合流して一本となり武庫川に流れ込む地点を見おろせ、また大阪から福知山を経由して日本海側にぬける交通路（現在の国道176号線）がすぐ下に通っており、その道から加古川水系の三木や西脇方面にぬける道（現在の県道三木・三田線や県道西脇・三田線）の分岐点も眼下に見おろせる交通の要地です。



北神第２地点古墳・第３地点古墳　位置図
（１／2,500）


第２地点古墳
箱式石棺
182.00
181.00
183.00
184.00
180.00
179.00
178.00
第３地点古墳
0
20m

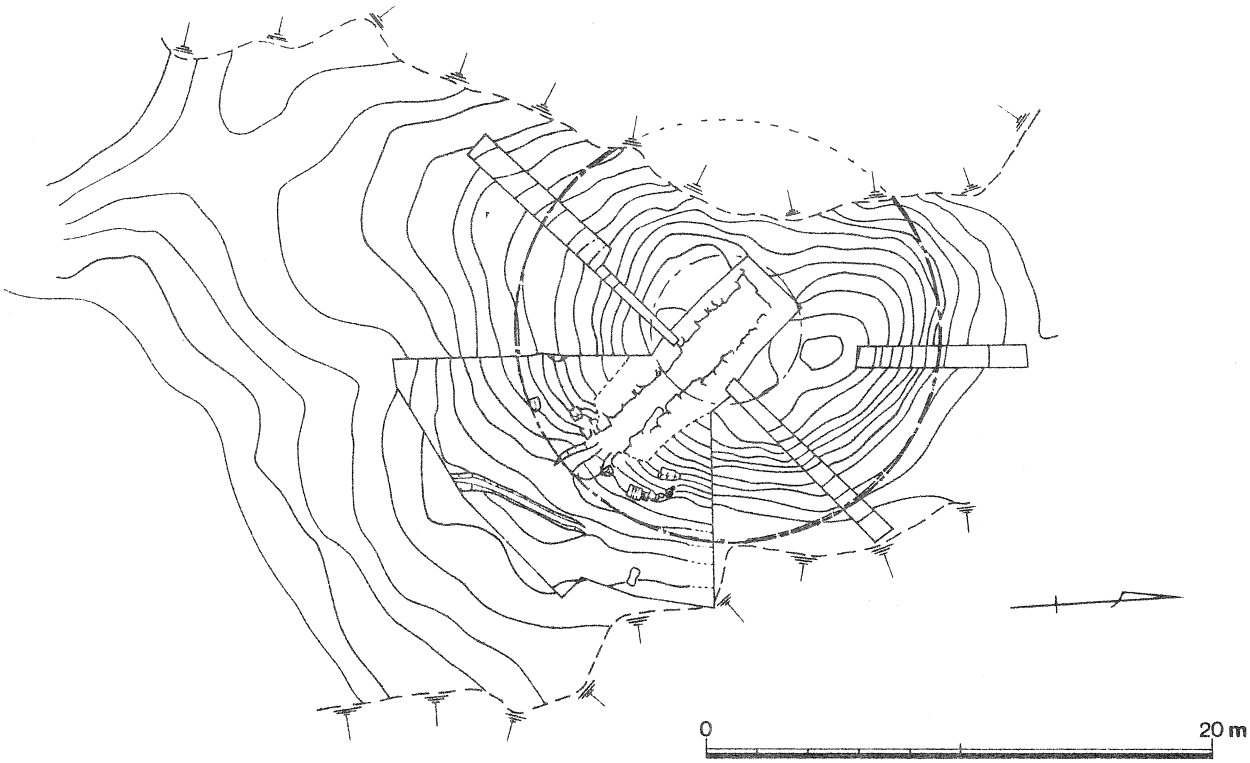
調査地測量図

4．調査の概要　第２地点古墳・第３地点古墳とも、調査前の現況ではすでに天井石がなく、石室の壁の石が露出している状態で、過去に盗掘を受けているようでした。また、墳丘（ふんきゅう）は第２地点古墳は円墳、第３地点古墳は前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）と見られていましたが、確かな規模については不明でした。

1）第２地点古墳

古墳の形と大きさ　北神第２地点古墳は、西側が後世に大きく削られていますが、調査の結果から直径17m・高さ約2.5mの円墳と考えられます。尾根の高い部分に盛り土をしてつくられており、自然の地形をうまく利用して、石室の入口方向からは実際より大きく見えます。

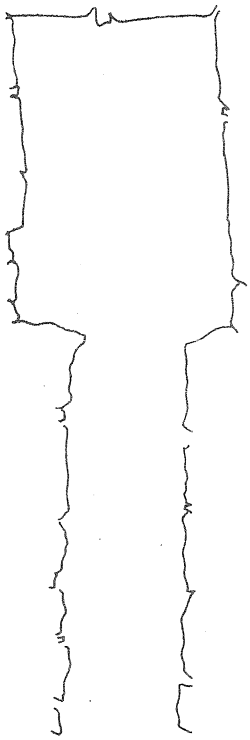
石室の形と大きさ　埋葬施設は南東方向に開口した両袖（りょうそで）式の横穴式石室で、二つの袖石（そでいし）に大きな一枚石を使っています。石室の全長は8.6mで、玄室（げんしつ）長3.8m・玄室幅2.3m・羨道（せんどう）長4.8m・羨道幅1.3mです。南側（右側）の側壁の上部は大きく崩れており、天井石もすべてなくなっていますが、玄室の高さは約２m以上あったと推定されます。石室は、側壁の石を天井に向かって徐々にせり出す「持ち送り」をしています。石室に使われている石材は、この付近で産出する凝灰質砂岩（ぎょうかいしつさがん）です。

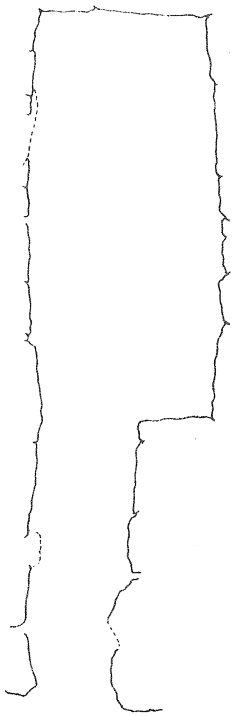


北神第２地点古墳

横穴式石室の構造

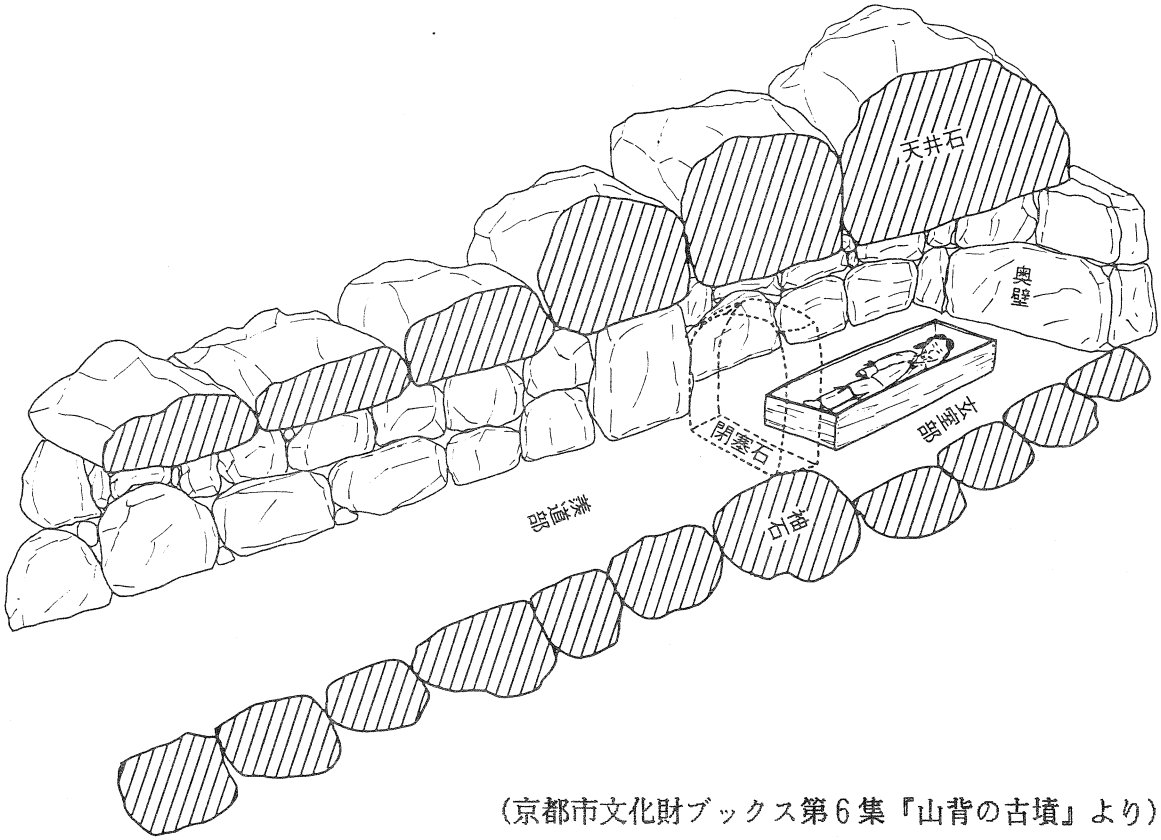
両袖式　　片袖式（左片袖）　　無袖式





高塚山３号墳

北神第２地点古墳　　北神第３地点古墳



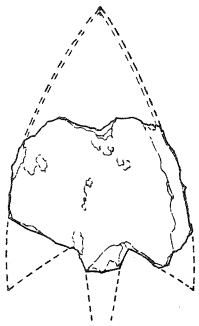
（京都市文化財ブックス第６集『山背の古墳』より）

A
B
C
D
184.00m
183.00m
182.00m
A
B
C
D
E 184.00
E 183.00
E 182.00
182.00m
183.00m
184.00m
0
3m

第２地点古墳石室

石室内部の状態　　石室内には崩れた側壁の石や天井石と土が流れ込んでいました。玄室のほとんどは、過去の盗掘により床面まで掘られており、築造当時のようすはわかりませんでした。しかし、水晶製の勾玉や須恵器・土師器・鉄製品のかけらが残っていました。また、盗掘時のものと考えられる銅銭（永楽通宝）も出てきました。玄室の床には、つくられた当時は板石が敷いてあったと考えられ、一部に残っていました。

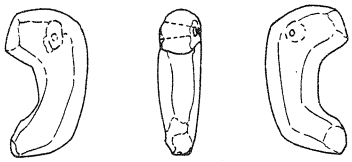
羨道部には崩れた石室の石材が土砂とともに多く落ち込んでおり、このため盗掘をまぬがれたようです。入口に近い左側壁（北側）にそって、須恵器の壺や提瓶など６個体が並べ置かれていました。玄室寄りの部分は、床面に多くの石とともに須恵器や土師器などの土器や鉄族（矢じり）などの鉄製品、耳環（金環）、滑石製紡錘車、琥珀製棗玉、ガラス玉、土玉などの装身具が出土しました。出土した須恵器がつくられた時期から、石室へは二回の埋葬が行われたと考えられますが、遺物の出土状態から、その後何らかの理由で玄室内の副葬品が羨道に放り出されたと思われます。



1

2

1・2：鉄鏃
　　S＝1／2
3：水晶製勾玉
4：ガラス玉
　　S＝2／3



3

4

第２地点古墳出土遺物

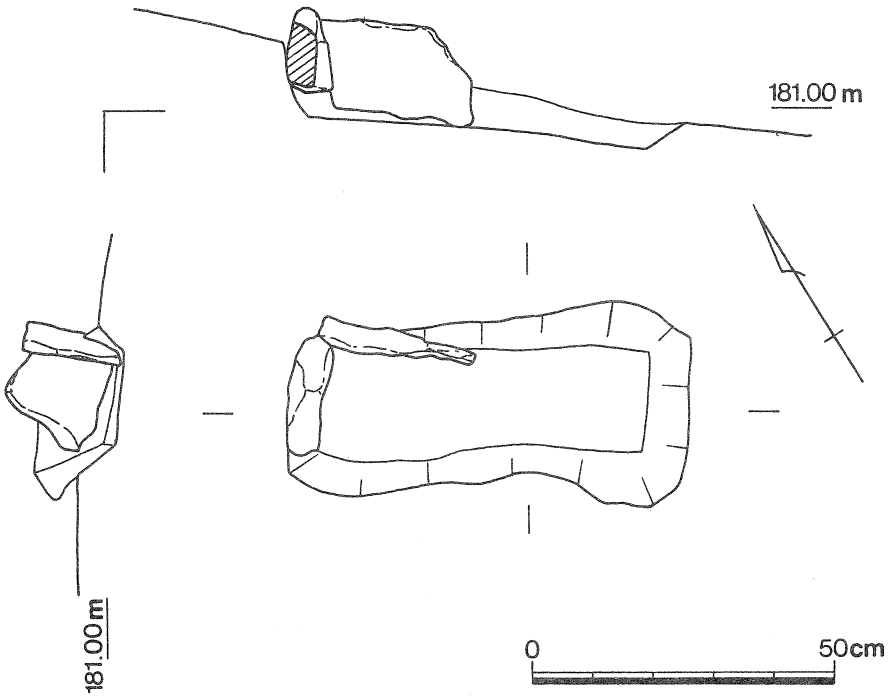
排水溝

羨道部には排水溝が設けられていますが、入口付近は幅が広く、墓道としての役目を兼ねていたものと思われます。石室の入口には、須恵器の甕（かめ）が砕かれた状態で出ています。これは、墓の前で死者のための祭りを行ったものと考えられます。

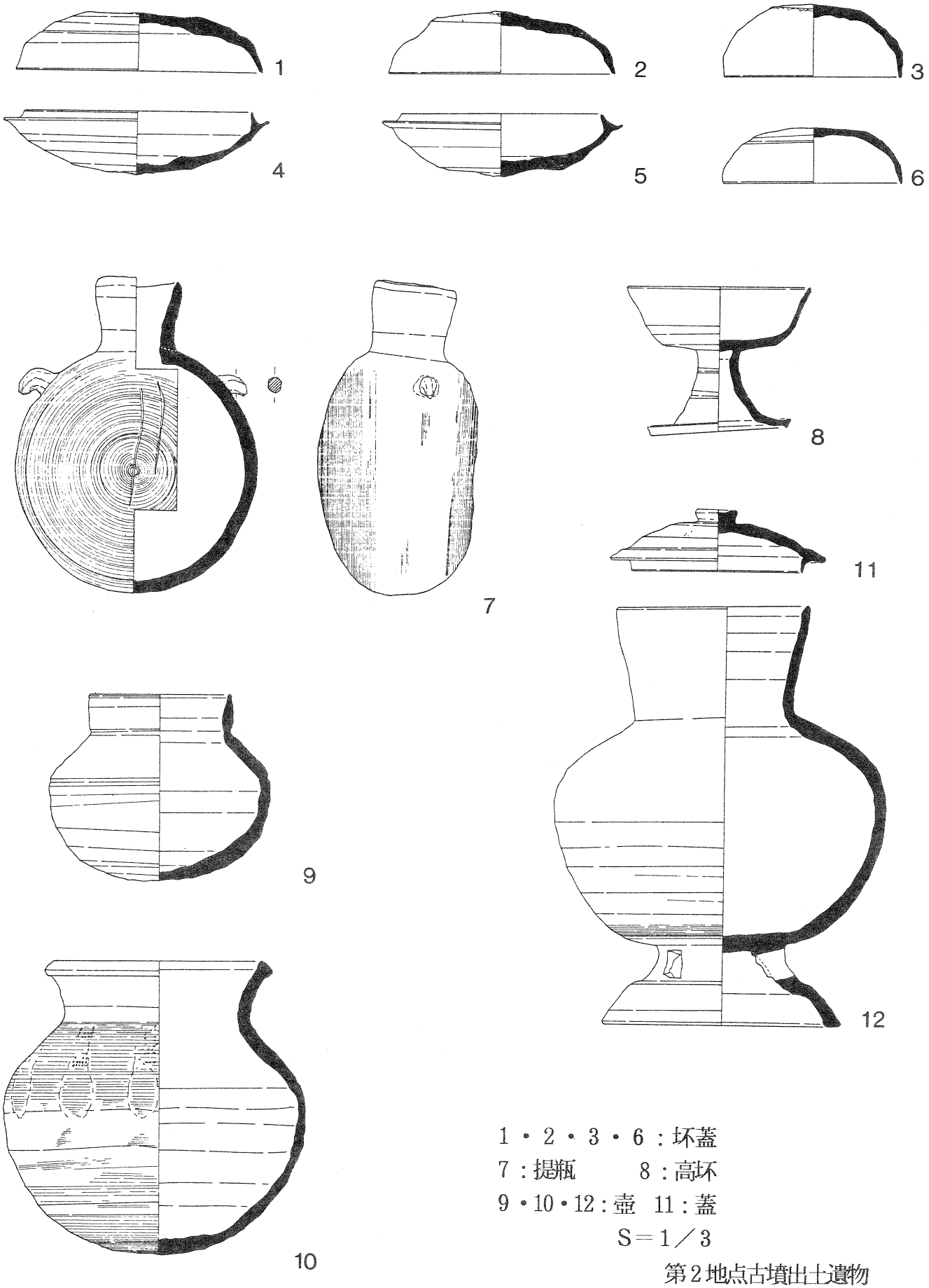
箱式石棺（はこしきせっかん）

石室入口の北側、墳丘の裾（すそ）から小型の箱式石棺が見つかりました。幅28㎝、長さ65㎝、深さ17㎝で、本来は四方に板石を組んであったと思われますが、短側壁と長側壁の二つの板石しか残っていませんでした。なかからは何も出土しませんでしたが、古墳と関係ある施設と思われます。横穴式石室の古墳の裾に、このような箱式石棺が伴う例は他にも見られ、市内では舞子（まいこ）古墳群のなかにあります。

第２地点古墳は、石室内から出土した遺物から、古墳時代後期の６世紀後半につくられ、６世紀末ごろにさらに追葬（ついそう）が行われたと考えられます。



箱式石棺



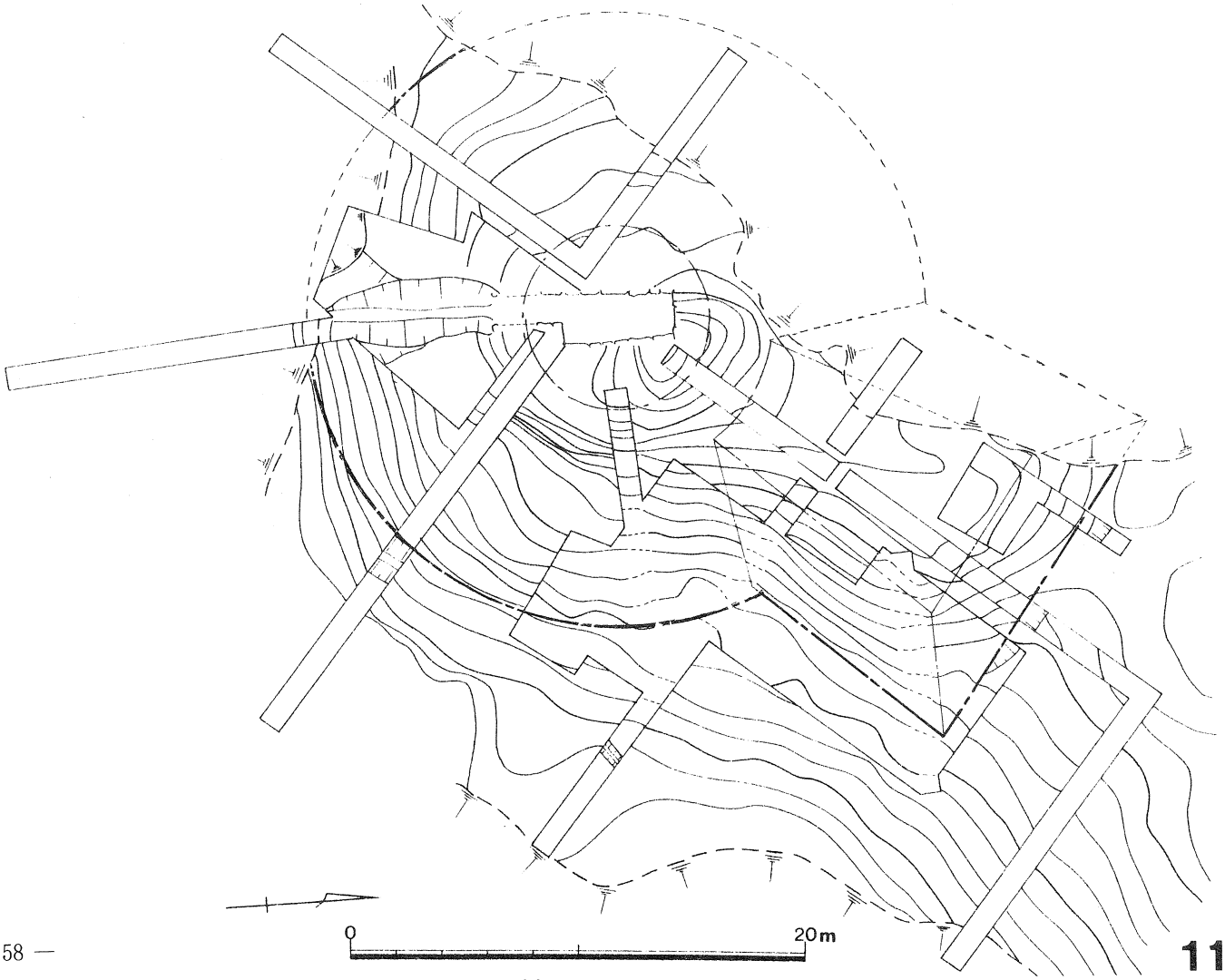
1・2・3・6：坏蓋
7：提瓶　　8：高坏
9・10・12：壺　11：蓋
S＝1／3

第２地点古墳出土遺物

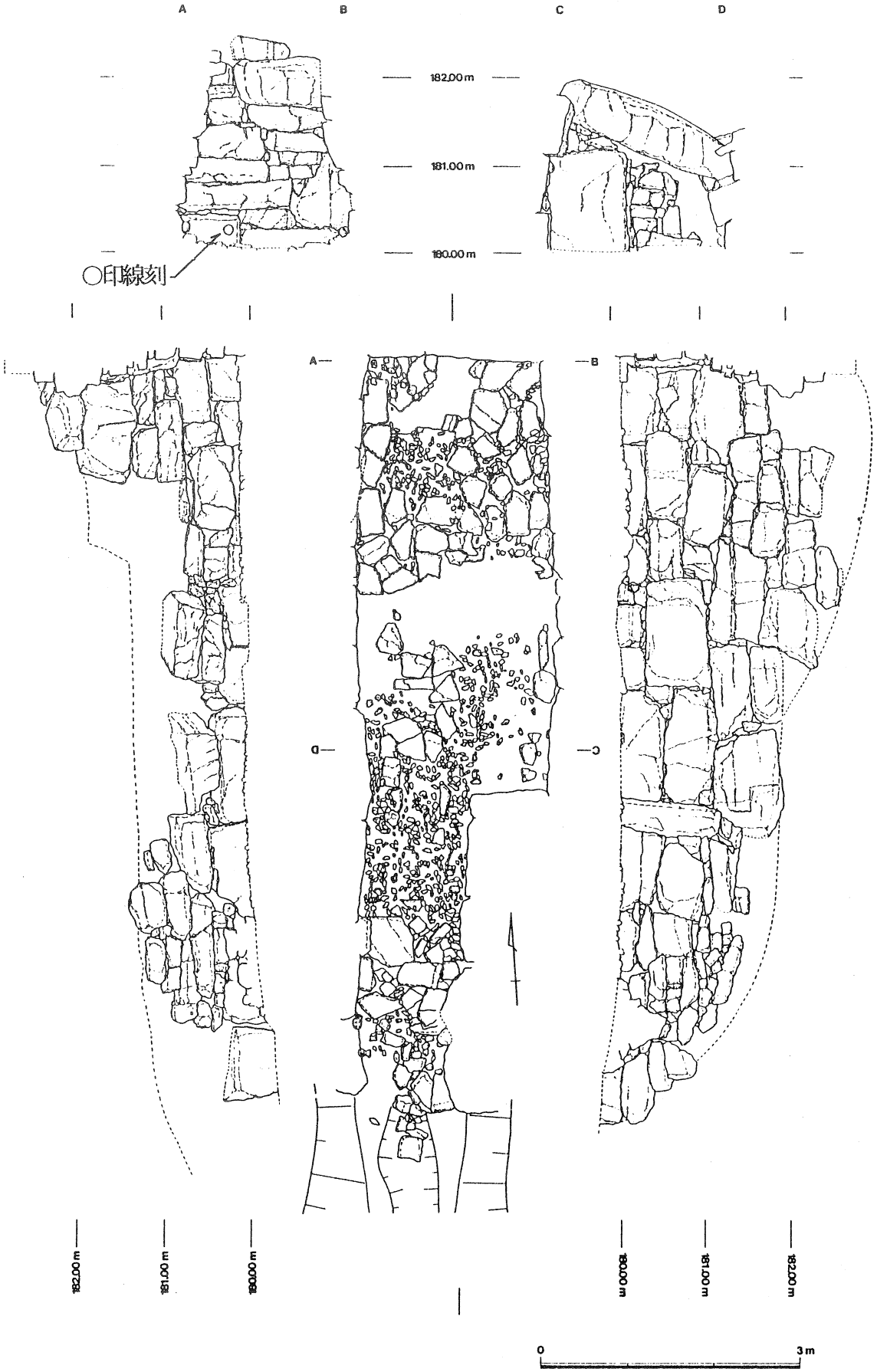
2）北神第３地点古墳

古墳の形と大きさ　北神第３地点古墳は、前方部を尾根の先端方向である北西に向けた前方後円墳です。墳丘は全体に後世にかなり削られていましたが、今回の調査で得られたデータから復元すると、全長36m・後円部径27m・後円部高約５m・前方部高約2.6mとなります。また、前方部の裾には溝が掘られています。

石室の形と大きさ　埋葬施設は南に開口した左片袖（ひだりかたそで）式の横穴式石室で、全長8.6m・玄室長5.0m・玄室幅2.0m・羨道長3.6m・羨道幅1.1mを測ります。過去に盗掘にあって、玄室の天井石は全てなくなっており、羨道部の天井石も最奥の石が崩れかかって残っているだけでした。また西側の側壁は１段目を残しほとんど崩れ、東側の側壁も最上段の石をほとんど欠いているため、正確な石室の高さはわかりませんが、玄室高約2.5m・羨道高約1.5mと考えられます。石室に使われている石材は、付近で産出される凝灰質砂岩です。



北神第３地点古墳



第3地点古墳石室

石室内部の状態　　玄室の床には凝灰質砂岩の板石とチャートの礫（れき）とを敷いた面と、その上に拳大（こぶし）の礫を敷いた面があり、追葬があったと考えられます。羨道の床には礫が敷かれているだけでした。

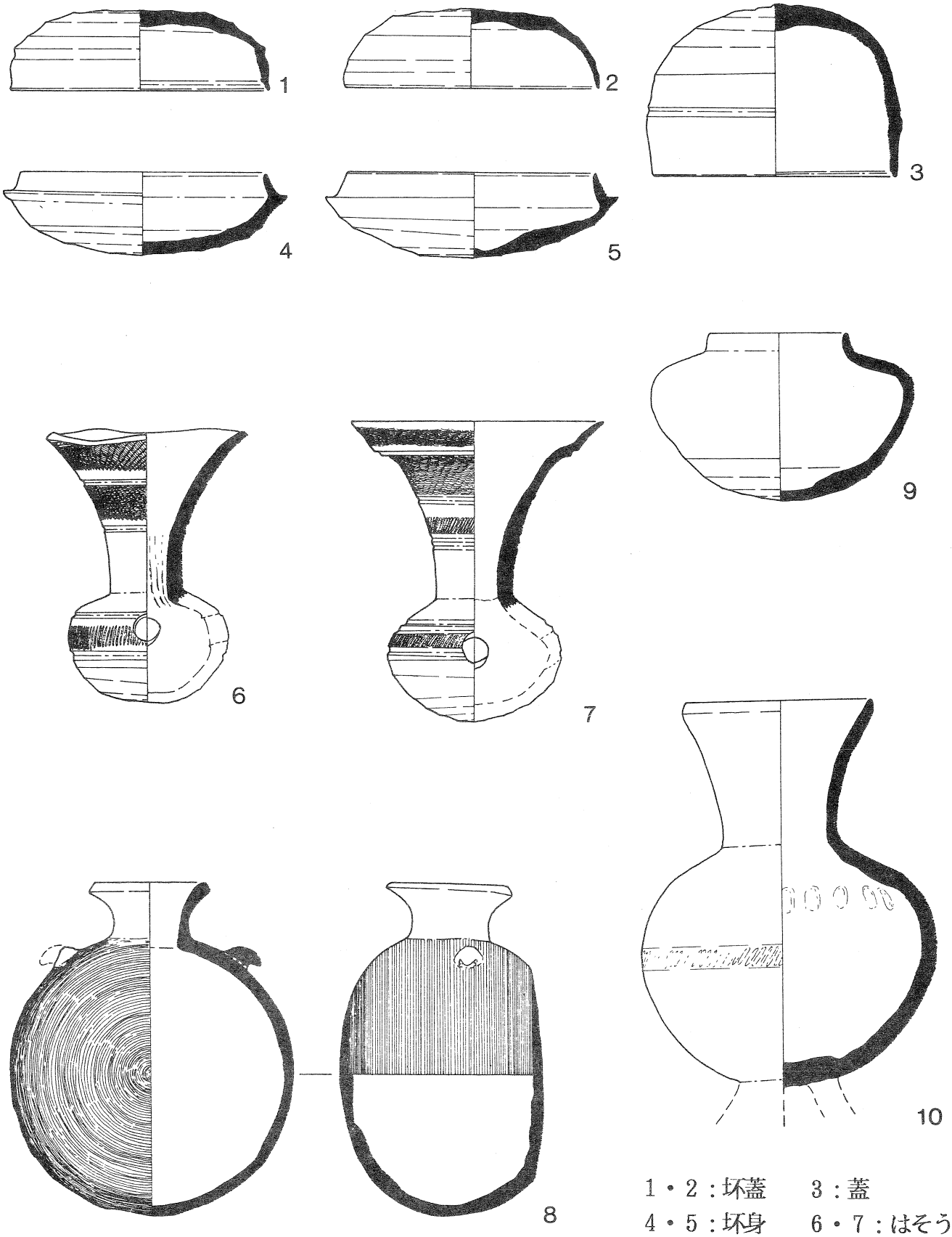
盗掘によって石室内はかなり荒らされており、副葬品もほとんど取り去られていましたが、埋まった土の中から須恵器の坏身（つきみ）・提瓶（ていへい）・はそう・蓋（ふた）や馬具（ばぐ）・鉄鏃（てつぞく）・ガラス製小玉（こだま）などが出土しています。

線　刻　　また奥壁の向かって左下隅の石には直径12.5cmの「○」印の線刻があります。横穴式石室内の線刻は、市内では、垂水（たるみ）区の高塚山（たかつかやま）古墳群中の２例に次いで３例目です。

墓　道（ぼどう）　　石室の入口から後円部の裾にかけては排水溝を兼ねた墓道がつくられており、その底には飛び石状に石が置かれていました。この墓道内からも須恵器の坏・壺・甕・はそうが出土しています。

石室内や墓道から出土した遺物から考えると、この古墳は古墳時代後期の６世紀中ごろにつくられたと考えられます。

○印線刻　拓影　　S＝1／2



1・2：坏蓋　3：蓋
4・5：坏身　6・7：はそう
8：提瓶　9・10：壺
S＝1／3

第３地点古墳出土遺物

５．まとめ

以上のように今回の調査では、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳を２基調査しました。

北神第３地点古墳は６世紀中ごろにつくられた前方後円墳でした。前方後円墳は当時のその地域の首長墓（しゅちょうぼ）と考えられており、この古墳も昔のこの地域を治める首長の墓と考えられます。横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳の本格的な発掘調査の例は神戸市内では初めてであり、兵庫県下でも３例目であることから貴重な資料となります。また「○」印の線刻は県下で初めて発見されたものであり、近畿地方でも珍しいものです。

北神第２地点古墳は６世紀後半につくられた円墳でしたが、両袖式の横穴式石室はこの時期には珍しく、石材も大きく立派であることなどから、北神第３地点古墳に続くこの地域の首長墓と考えられます。

これまで北神三団地内で調査された古墳は今回の２基の古墳も含めて６基になります。これらの古墳は同時期につくられたものがないことから、この地域の首長墓がこの丘陵上に次々とつくられていったことがわかり、地域の古墳時代の社会を知る上で貴重な資料となります。

保存整備のため調査を行いましたが、第２地点古墳・第３地点古墳とも、石室の状態から、石室を公開しての整備は難しいと判断されました。このため、今回の調査のあと、石室は現状のまま埋め戻して保存することになります。石室の公開は、この現地説明会で最後になりますが、今後、前方後円墳（第３地点古墳）と円墳（第２地点古墳）の墳丘整備を行う予定です。

調査については、神戸市土木局北神開発事務所のご協力を得ています。また、神戸市文化財専門委員の和田晴吾先生および、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館　猪熊兼勝学芸室長のご指導を得ました。

平成元・３年度　遺跡現地説明会資料

平成５年３月　発行
発行　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
印刷　㈲　興　文　社
神戸市中央区中山手通７丁目５－７